
亜人少女に花束を

笹田護

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亜人少女に花束を

【Nコード】

N9988W

【作者名】

笹田護

【あらすじ】

彼女との出逢いがすべての始まりだったんだ。

聖光神教の信者たちによって建てられた国、レイズリア王国。この国は“異教徒”及び“魔物・亜人”を殲滅するべくして創られた一つの聖堂騎士団と三つの神殿騎士団を抱えている。

その騎士団の内の一つであるグラーナ神殿の新人神殿騎士であるハンス・ガーマエフはある満月の夜、森の中の泉にて記憶喪失の竜

人 ドラゴンニュート、レイフィーラを保護してしまう。それがすべての発端だった。

ハンスのもとに次々現れる人ならざる乙女たち……勃発するレイズィア皇国対亜人連合 セド・チルドレン との戦争……亜人と人間の間で揺れる心、ぶれる信仰心……。

身分も力もないハンスは、果たしてどのように考え、何を信じて行動するのか？ 人外少女と一人の騎士が紡ぎだす複雑怪奇・運命奇譚、ただいま参上！

王道であるかどうか激しく微妙なハイファンタジーです。

#01 月の綺麗な夜に

常緑樹の生い茂る森の中を、一人の青年が闊歩していた。

父親譲りのハニーブラウンの癖毛に母親から授かった大海の深部のような群青色の瞳、一際長い睫毛。そして一族代々伝えられる気品溢れる、しかし高すぎる鼻。腰には粗末に削られた木刀を差し、瘦躯を三角と横長の長方形を重ね合わせたかのような紋章が刺繍された赤銅色の外套で包んでいた。この格好から彼は大地神 グラーナを祀っている神殿の関係者だということがわかる。

「今日は満月、か」

男性にしてはやや高い声で青年はそう呟いた。口元がやんわりと吊り上り、海底に日の光が差したかのように群青の瞳に穏やかな輝きが宿る。どうやらかなりの上機嫌であるらしい。自然、青年の歩みは早足に変わり、ついには駆け足になった。草花を踏まないように気を付けつつ物音にも気を払いながら、青年は獣道を一切迷いなく突き進む。程なくして、青年は獣道の終わりに辿りついた。

道は泉へと通じていた。

透き通った水面は微弱な風によって微かに揺れて、月光を乱反射している。そして風が止めばまるで巨大な鏡のように満月と曇りない星空を映し出す。水はそのまま手ですくって飲めるほど澄んでいて、遠くから虫たちのさえずりが風に乗りやってくる。岩に付着したヒカリゴケが泉の水面を縁取っている。

青年　　ハンスはこの泉の、特に満月の夜の景色が好きだった。
「さて、と」

ハンスは腰に差していた木刀を抜き放つと、それをかざして上段の構えをとった。すうと一息吸い込んで、

「いち、にい、サン……」

素振りを開始した。

木刀を無駄のない動作で振り下ろし、またあげる。その一連の動

作を水面に映る自分を意識しながら黙々と繰り返す。身体の軸がぶれないように、太刀筋を意識して、足運びにも気を払いながら……。毎晩勤務時間が終わった後、神殿の近くにある泉で素振りをする。これが神殿騎士であるハンスの日課であった。

素振りを終え、水面が覗きこめる位置の岩に腰掛けハンスは一息をついた。火照った身体に夜風は心地よい。心が充足感に満ちてゆくのがわかる。

ふと、目蓋の裏に憧れの騎士の顔が浮かぶ。ハンスは憧れの彼に近づけたかと自問して、いや、まだまだだと頭を垂れた。彼の實力、人徳には自分とはとても及ばない。それに自分の實力ではまだ『亜人狩り』にすら参加できないのだ。

ハンスは（頑張ろう！）と自身に言い聞かせ、勢いよく立ちあがった。そして夜空を仰ぐ。優しく暗い森を照らす月明かりが、ハンスには満月からのささやかなエールのように思えた。ハンスは天空神 カイラス に感謝の祈りを捧げ、泉を立ち去ろうとした。

その時だった、ハンスの目に不遜な物体が飛び込んできたのは。

最初は月が欠けたのかと思ったが、どうやら違うようだった。それは翼を広げて夜空をぎこちなく飛んでいて、だんだんこちらに近づいてきているようだった。姿は地上からでは陰になっていく確認できない。

陰はゆっくりと減速し、やがて翼がピタリと止まった。そして、

「うわああああ！！」

急速に落下を開始した。ハンスはそれを見てようやく我に返り、叫び声を上げながらその場から飛びのいた。

次の瞬間、バツシャア　　ン！　と派手な音を立てて泉に大きな水柱が発生し水飛沫が飛び散った。陰は運よく泉の中に落下しただけ。水面にはしばらく波紋が立っていたがすぐに元の静かな水鏡に戻った。そして陰の正体が浮上してきた。

「何なんだ……？」

おそろおそろハンスは落下物に近づいた。顔は見えないが華奢な身体や背中の中半ばまで伸びた黒髪を見る限り、どうやら女性であるらしい。なぜこんなところに女性が……そんな考えが頭をよぎった。しかしこのまま放っておくこともできない。

ハンスは泉に入り込み女性の腰を抱えると、一気に引き上げて仰向けにして草の上に寝かせた。

思わず、ため息が漏れた。

その少女のあまりの美しさに心を奪われてしまったからだ。少女は青白い顔で瞑目しているのだが、とても気品に溢れる顔立ちをしていてまるで眠り姫のようだった。ハンスはなすべき事をすべて忘れ、彼女に魅入ってしまった。

「いけないいけない、早く神殿に連れ帰らないと……」

首を振って正気を取り戻し、彼女の身体を自分の外套で包み抱え上げた。その拍子に泉の清水で濡れた黒髪が揺れた。

「なっ！？」

ハンスは彼女の頭部に“生えている”ものを見て愕然とした。思わず彼女を支えていた腕の力が緩み、彼女は地面に衝突する。

「こいつ……やっぱり！」

思わず声を荒げ、半歩後ずさり首を振って頭をかきむしる。ハンスの頭の中に恐ろしい仮説が生まれた。上空を翼で飛んでいた時点で気付いてはいたが、実際にそれを認めてしまうと震えが止まらない。

白く尖った牙。髪で隠れてしまうほどに小さな角。そして力なくうなだれる、黒い鱗に覆われた立派な尻尾。

彼女は人ならざる者　ハンスたちが悪魔として恐れる人間に近い姿をした魔物、『亜人』だったのだ。

#01 月の綺麗な夜に（後書き）

初投稿です。まだこのサイトのシステムに慣れていないため不具合が生じるかもしれませんが、頑張っていきますのでどうかよろしくお願いいたします。

この作品がファンタジー好きや人外娘好きにとってストライクになればな、と思っております。

#02 レイフイーラ

グラーナ神殿の最寄りの街ラニアの外れには、ハンスの自宅がある。こじんまりとした木造で居間と厠とかまどくらいしかないが、それでも一人で住むには十分広い。

ハンスの父はかつてグラーナ神殿騎士団長だったが、ハンスが乳飲み子の時に突然退職し先祖から代々伝わる土地もすべて神殿に返上してしまった。そして残ったわずかな資金でこのラニアに家を建て、大地神を信仰する貧乏な農家に様変わりしてしまった。ハンスには屋敷に住んでいた頃の記憶もなければ鎧を着た父の姿も見たとがない。

両親はハンスが騎士になることに最後まで反対していた。しかしハンスが反対を押し切って首都アウルダムで修練を積んでいる内に、どちらも流行病であっさり死んでしまった。ハンスは両親を説得し切れなかったことと、神殿騎士になった自分の姿を見せられなかったことを今でも後悔している。

普通、神殿騎士は神殿にある宿舎もしくは最寄りの街にある宿舎で生活する。ハンスのように神殿の近くに自宅を構える者のみ教皇庁に申請することで自宅通いを許されるのだ。

ハンスの家は神殿からはかなり遠く、毎日夜明け前に家を出ねばならない。たまにそれを不便に感じることもあるが、それでも家を手放さず住み続けることを選んだのは、やはり家族の思い出を捨てきれないからであろう。

「どっつしたものか……」

そんな家の薄汚れた居間にて、ハンスは重い溜息をついた。彼の憂鬱な視線の先には少女の姿をした“何か”が安らかな表情でベッドに横たわっている。一応手首をベッドの脚に縛り付けておいたが、

果たしていかほどの効果があるか。

結局ハンスは彼女を神殿につき出すことも放置して帰ることもできず、とりあえず家まで連れ帰ることにした。自宅通いなのが幸いして他の神殿騎士に見つかる危険性はない。

何故こんなことをしているのか、理由は自分でもはっきりとは分からない。強いて言うなら持ち前のいらぬお節介とくだらない好奇心が働いてしまったからだろう。我ながら愚かだと思う。眼前の少女は目覚めた途端に自分に牙を剥くかもしれないのに。

せめてもの気休めに、木彫りの大地神像を握りしめ出入り口付近に立って逃げ道を確保しておく。いざとなればここから逃げ出して同僚たちの眠っている宿舎まで駆け込めばよい。そんなことをぼんやり考えていたその時だった。

「うう……」

横たわっていた少女が艶めかしい声を上げて、大きく身じろぎした。突然の出来事にハンスの心臓は跳ね上がり、反射的に後ずさるうとして扉に頭をぶつけてしまった。少女は発達途中の華奢な身体を揺らしベッドの上で呻いていたが、やがてパチリと眼を開き、

「……？」

こちらを向いた。とっさに目が合ってしまう。

黒真珠を思わせる、高貴な漆黒の瞳だった。少女は有無を言わせぬ眼力を持っていて、ただ見つめられているだけなのにこちらの動きが封じられてしまった。黒い瞳の奥に飲み込まれてしまった自分の阿呆面が見える。

しばらくして少女はハンスから視線を外すと、黒真珠で部屋中を観察し始めた。せわしく動いていた瞳はやがて、自分の手首とベッドの脚を繋ぎ止める荒縄でピタリと止まる。少女は何か言いたげな表情でこちらを見つめ、口を開きかけたがまたすぐに閉じた。そしてやや警戒心を露わにした瞳で、静かにこちらの出方を窺ってい

る。

どうする？ 今の状況をどう説明する？

「き、気が付いたんだ……。僕はハンス、怪しい者じゃないよ」

神像をきつく握りしめて冷や汗を垂らしながら、何とかハンスは言葉を発することができた。少女はまだその黒々とした瞳でこちらを睨み続けている。外観だけなら間違いなくハンスより年下なのに、眼力も華奢な身に纏った威圧感も常人の域を逸脱している。まるで百年以上生きていた大蛇に睨まれてしまった哀れな子ガエルのように、ハンスは今視線だけで少女に殺されてしまいそうなほど竦みあがっていた。息さえできないほどの圧迫感に、今すぐ背後の扉を開けて逃げ出したい衝動に駆られる。

「縄を、ほどいて」

血色のいい唇が動いて、不意に少女がそう一言呟いた。繊細で気品が溢れる淑女でもあり、情熱的で艶やかな娼婦でもあるかのような、とにかく一度聴いたら忘れられない特徴的な声だった。

「早く」

ほどいてもらうのが当然であるかのように、少女は横たわった姿勢のまま、固まって動かないハンスに向かってそう促した。黒真珠がハンスを捉える、甘い声がハンスに命令する。気が付けばハンスは、ベッドのそばまで歩み寄って少女を繋ぎ止めている縄に手を掛けていた。

「っつて、危ない！」

ほとんど無意識の内に少女の縄を解放しようとしてる自分に気づき、ハンスは愕然とした。まるで少女に操られてしまったかのようだ。

位の高い亜人の中には、視線によって相手の精神を支配することができる能力を持った者がいると言う。この少女もその類いなのだろうか？ 確かにこの少女の全身から漂う迫力はただの亜人にして

はあまりに強大だ。そのため色白に黒髪の華奢な体つきながら、弱々しいや可憐といった印象からは無縁である。

「……」

ぼうつとしてるといつの間にか、少女がか細い腕でハンスの手首を掴んでいた。上目遣いで見上げるその表情にはじんわりと“不安”が滲んでいる。

「すまないがすぐに君を解放する訳にはいかないんだ。もし良ければ僕の質問に答えてくれないか？」

努めて優しく落ち着いた表情を心がけながら、ハンスは彼女から目を背けずにそう諭した。少女はポカンと口を開けていたがやがてゆっくりと首を縦に振った。

「君の名を覚えてくれないかい？」

「……レイフィーラ」

少女は気恥ずかしいのか、ハンスから視線を逸らしつつそう囁いた。内気な姫君のように、か細く空気中ですぐ溶けてなくなってしまうような声だった。

レイフィーラ。

何と美しい名前であろうか。背中の中ばまで伸びた黒髪は夜風のように穏やかな曲線を描いていて、瞳はこの世の真理を体現するかのよう真つ暗でほんのわずかな光が燈っているのみだ。黒のみで彩られた髪や瞳とは対照的に肌の色は純白で統一されている。その白は誰も触れていない初雪のようでもあり、夜明けを告げる日の光のようでもあった。身に纏っている衣服こそみすばらしいが、却ってそれが彼女の隠しきれない美しさと気品を引き立たせている。常人並みの亜人でさえも 逸脱した風格をもったモノクロの少女。

そんな彼女にこの名はピッタリだ、とハンスは胸中にて呟いた。

「君はグラーナ神殿近くの泉に墜落して、それを僕がこのラニアの街まで運んできて手当をしたわけなんだけど……君の身に何があったのか、教えてくれないかな？」

不快感を与えないように言葉を選んで、ハンスは踏み込んだ質問をしてみた。“神殿”と聞くと大抵の巫人は洗面を浮かべて、場合によっては暴れ出すことすらあるほどだがレイフィーラにはそんな様子も兆候も見受けられない。

しかし彼女は気まずそうに口をつぐんで黙り込んでしまった。少し質問が悪かったか……ハンスは質問を変えてみることにした。

「君はどこに住んでるんだい？ 見たところこのあたりの出身じゃないみたいだけど」

沈黙。

彼女はますます決まりが悪そうになって、ついにはそっぽを向いてしまった。外見通りの子供っぽい仕草で、巫人でなければこの様子に微笑ましい気持ちになっていただろう。

だが今はそんな呑気な事態ではない。彼女は巫人、事情をできる限り詳しく聞いたのちに然るべき対処をせねばならない。

仕方ないがリスク覚悟で踏み込んだ質問を試みようか……そうハンスが考えていた時だった。

「何も、憶えてない……」

「えっ？」

予想の遙か斜め上をいく回答に思わず間抜けな声が漏れてしまった。頭の中で、今レイフィーラが言ったことを反芻してみる。

『何も、憶えてない……』、それってつまり。

「もしかして記憶喪失なの？」

レイフィーラの血色のよい唇が、キュッと結ばれた。そして遠慮がちに小さく首肯した。目を悲しげに伏せ白い掌が青紫まで握りしめられブルブル悔しそうに震えているところを見るとどうやら嘘はついていないようだ。

つまり彼女は自分が何者かわからない状態でわけのわからない場所に拘束されていて、しかも行くあてもないときている。ハンスも

同じ状況だったならばきつと不安と心細さに押し潰されてしまうだろう。

レイフィーラはハンスの様子を黒い瞳で、ひたすら見つめていた。先ほどまでの威厳が見られない可憐で弱々しい外見相応の表情で、何とも魅力的である。ハンスは彼女に近づくと、今度は確固たる自分の意志で荒縄に手を掛けた。そして目の端にじんわり水滴を蓄え始めた少女に微笑むと、一気に縄をポケットに忍ばせていたナイフで切断する。

「君の事情はわかったし、とりあえず解放するよ。ごめんね、女の子にこんな真似をしちゃって」

「いや、そんな……わたしは……、その」

しどろもどろになりながら、レイフィーラは僕の言葉を否定しようとする。今の彼女はどう見ても普通の少女のようで……ハンスはふと感じたほんの少しのときめきを、すぐに胸の奥に追いやった。

「君、行くあてがないにしてもこの国からは早く出たほうがいいよ。この国は聖光神信仰によって成り立つ国。レイズィア皇国だ。教会や神殿の人々はみな巫人を害悪視している。もし彼らに見つかれば君は処刑されてしまうだろう」

彼女を不安にさせてしまってもいいが、あえて強い口調でハンスは念を押した。そうまで警告しなければならぬほどこの国は巫人に対して厳しい国なのだ……神殿騎士の端くれであるハンスはそれを強く自覚している。

「なら、どこに行けばいいの？」

ハンスはしばし腕を組んで考え込んだ。隣国である魔術大国、ワイトラット王国も巫人狩りに消極的ながら加担しているし、他の近隣諸国だって同様だ。このあたりは聖光神体系の信者が歴史的にとっても多い。一度彼らに“邪教の信者”、“悪魔の手先”とみなされてしまった巫人たちにとってこのあたりは地獄よりも住みづらんだろう。まずはレイズィア皇国と同盟を結んでいる国々から抜け出さねばならぬだろう。

「南下してこの大陸を離れるのが一番安全か？　しかしそれだと遠いし」

ドシイイイイイイイイン！！

そんな風に世界地図を頭に思い浮かべていると、突然大きな破裂音と振動を同時に感じた。爆音とそれによる空気振動は容赦なくハンスの鼓膜に侵入し、脳を揺さぶる。ハンスは思考を中断し、耳を塞いでうずくまらざるをえなかった。

「いきなり何なんだよ……！　いったいどうなってる！？」

ハンスは外を確認しようとしたが、それより先にレイフィーラが素早い動作で家から飛び出ていった。「おい！　うかつに外に出るのは危険だ！」　ハンスもそれに続く。

外に出ると、家の玄関先の地面がごっそりなくなり、代わりに半径五メートル程度の穴がぽっかり開いていた。穴からはスス臭い煙が上がっていて、隣のレイフィーラはその煙のもとを凝視している。不意に、煙が穴の中央からの烈風によって巻き上げられて掻き消えてしまった。そして穴の中央に立つ人影をはっきり確認できるようになった。

還暦前くらいの老人だった。黒い燕尾服にずいぶん豪華な赤ネクタイをして、まるで執事であるかのような出で立ちであった。ほぼ灰白色の頭に二本の立派にねじれた角を生やし、背中からは赤い翼が隠すことなく堂々と広げられている。

「レイ様、探しましたぞ……！」

老人は感極まった声でレイフィーラを紅色の瞳で見つめた。見れば老人の目からはうっすら涙が浮かんでいて、老人はポケットの中から青い上等なハンカチを取り出しそれを拭いはじめた。横にいるレイフィーラの様子を覗くと、案の定頭に疑問符を浮かべて首を傾げていた。

「誰ですか、あなた？」

「またまたレイ様ご冗談を。まさかこの爺やを忘れてしまっはずがありますまい。さ、お父上のもとに戻りましょう」

「……いや」

「今何とおっしゃいましたか？」

「やだ！ 絶対いや！」

爺やと名乗った老人は、目を見開いて卒倒しそうになった。レイフィーラに拒絶されたからだろうか？

にしてもおかしい。何故レイフィーラはそこまで爺やの提案を頑なに拒否するのだろうか。相手はレイフィーラのことを知っており、しかも敵意も感じられないというのに。

「どういうことですか、レイ様！？」

「わたしは帰りたくない！ わかんないけど、とにかく帰っちゃいけないの！」

「どういうことなんだ！？」「どういうことなのですか！？」

ハンスの発した声と、爺やの戸惑う声が重なった。そして二人は互いに見つめあう……老人と熱い眼差しを交わしたところで意味などないが。

「この人間のせいなのですか……？」

突然話が思わぬ方向に飛躍した。爺やはハンスに静かな怒りを込めた視線を投げかけている。レイフィーラはふるふる首を振ったが爺やは「そうだ、そうに違いない……」などと呟きながらその老いた身体を不自然に震えさせ始めた。そして、

「貴様、神殿の人間だろう！ レイ様に何をしたかは知らんがその身で罪を償ってもらおうぞ！！」

老人とは思えない力強い声で、爺やはそう咆哮した。紅の瞳が爛々と輝いたと思えば角や牙がにゅっと伸びて、赤い翼がバタバタ運動を始めそれと共に狂ったかのように身体を振動させる。すると不可思議な現象が起こり出したのだ。

しわがれた瘦躯には筋肉がみるみる盛り上がり、かさかさの肌を

覆つかのように瞳と同じ紅色の鱗が翼から全身に広がっていった。鱗に染まりきると今度は骨格が変化しだした。顎骨が突き出され、口元は大きく裂け中からはギザギザの牙がいつの間にか生え揃い、同様に角はねじれ反り返るほどに伸びて爪も一つ一つが鉤爪か小振りな剣であるかというまでに立派になっている。体長はその間にハンスの倍ほどまでに成長し終わり、爺やは今や完全に“竜”と化していた。「ウオオオオオオ……！」老人はもう一度咆哮した。今度は地を揺さぶり見る者を恐怖に叩き落とす竜の咆哮だった。

竜人 ドラゴンニユート。竜と人の混血とも言われている亜人の種族の一つ。

実物を見るのは初めてだがなるほど、確かにとんでもない迫力だ。さすが数ある亜人の中でも最上級階層に属しているだけのことはある。身動き一つ取れないではないか。

「ど、どうしよう?」

レイフィーラが赤竜に変化した爺やを見ながら、身動きの取れないハンスの腕を引っ張った。かなり強い力で揺さぶられてようやくハンスは我に返ることができた。そしてハンスはいつの間にか距離を詰めていた爺やの腕をかがんでかわした。レイフィーラと手はつないだままだったので彼女もつられてかがむ。

「レイフィーラ。君は逃げるんだ」

「えっ?」

思わず間抜けな返事をしたレイフィーラに構わず、ハンスは話を続ける。

「南へ いや、この際どこでもいい。とにかく、すぐにこの場から離れてできるだけ遠くに逃げろ!」

「でも、あなたは」

反論を試みるレイフィーラの唇に人差し指を押し当てた。レイフィーラは目を丸くして黙り込んでしまう。それでいい。

「僕が何とか時間を稼ぐ。だから君は行け!」

自分が何故こんな愚行を繰り返すのか、わからない。満月がハン

スを狂わせているのだろうか。

強いて言うならやつぱりいらぬお節介だろう。だがたとえ亜人だったとしても少女を助け、話をしてしまった以上見殺しにはできない。虚勢だとしてもいい格好をしたい。

いまだ渋っている少女にハンスはこれ以上ないくらい強い視線を注いだ。黒い瞳がハンスの群青の瞳に飲み込まれる。そして「こっちは大丈夫だから」と優しく微笑みかけた。レイフィーラはそれでも迷っていたようだが、

「絶対怪我しないでね！」

ついに満月が支配する夜空を、同色の黒い翼ではばたいていった。レイフィーラの姿はすぐに闇に溶けてなくなってしまった。

「レイ様！」

赤竜と化した爺やは巨体に相応しい巨大な赤い翼をはばたかせレイフィーラの後を追い縋ろうとする。それを阻止すべくハンスは赤竜の眼前に立ち、両手を思い切り広げ通せんぼの姿勢を取った。

「どけ小僧！！」

赤竜の顔が真ん前に迫る。血走った目は視線だけで矮小なハンスなど殺してしまえそうなほどに切れ味鋭く、裂けた口から惜しみなく放たれる怒号は耳がちぎれそうなほどの音量だ。だがハンスはそれを真っ向から受け、耐えきった。

「僕は何の事情も知らないが、いきなり来て暴れ出すようなドラゴンニユートを放置するわけにはいかない！ここを通りたくば僕に事情を説明するかもしくは僕を倒してみろ！」

「人間……風情が……生意気なっ！！」

ハンスの言葉に返答することなく、激昂に任せるまま赤竜ははばたいてハンスのもとに尻尾を薙ぎ払った。落ち着いてハンスは後ずさってそれをかわす。

「まず貴様を血祭りにあげてからレイ様を保護しようではないか！」
赤竜がレイフィーラから注意を外し、代わりにハンスへと狙いを定めた。ハンスは明確に向けられる殺意にたじろぎながらも内心ほくそ笑んだ。赤竜はまんまと挑発に乗ったのだ。

ピリピリとした空気がハンスの周囲を、ひいては街全体を包む。じりじりと、赤竜との距離を量りながらハンスは空がやや白み始めてきたことに気付いた。もうすぐ夜が明ける。早くこの騒ぎを聞き付けて同僚が駆けつけてくれればよいのだが……。

赤竜が動き出した。強靱な腕をハンス目がけて振り下ろす。かわしたが、速い。地面が抉れ、ハンスの家の前に穴ぼこがもう一つできてしまった。逃げてばかりもいられないので、ハンスは相手の懐に潜り込み木刀で腹部を……、
「しまった！ 木刀は家の中だ」

何もできなかった。代わりに赤竜の太い足から繰り出される強烈な蹴りをまともに食らう。これでは自分は相手に殺されに飛び込んできた愚か者ではないか そんなことが頭によぎり、ハンスは自分の家に衝突した。木造のボロ家だが何とかハンスを受け止めてくれたようだ。みつともなくハンスは背中から地面に落下し、仰向けの状態で動かなくなる。

身体が痛い。もう無理、死にそう……なんて情けないことまで考えてしまった。腹部に蹴りを食らったわけだが、呼吸がうまくできずただただ酸を含んだ熱いものが込み上がってきて吐きそうになる。肺が、もしかしたら内臓もやられてしまったかもしれない。

赤竜は近づいてきて、憤怒の形相でハンスを覗き込んだ。
「どうして貴様のような輩がレイ様を匿っていた？ そもそもレイ様はお屋敷を何故逃げ出したんだ？」

知らないよそんなの。こっちが聞きたいくらいだ。

「まあいい。すべて後でレイ様からお訊きすればよいだけのこと。貴様を殺してからな……！」

嗚呼、赤竜の足が振り上げられて、一気に振り下ろされる。ハン

スは抵抗できずただそれを受け入れるしかない。赤竜の足裏は妙につるつるしている。へえ、ドラゴンって足の裏には鱗がないんだなあ……そんな他愛のないことが頭をよぎる。案外、人は死ぬときこんなどうでもいいことを思うのかもしれない。たぶん赤竜に踏まれたら自分はミンチになって、そうなればもはや蘇生は望めないだろう。

レイフィーラ、彼女は逃げ切れるのだろうか。自分は赤竜相手にまったく歯が立たず、時間稼ぎにすらならなかった。恐らく逃げ切れないだろう。でももしかしたら捕まったほうがいいかもしれない。だって赤竜はレイフィーラに仕える立場のようだから手荒な真似はしないだろうし、何よりあの爺やときちんと会話すればすぐにでも彼女の記憶は戻るだろう。

待てよ？ それじゃあ自分は何のために赤竜に立ち向かったんだ？ 何のためにこれから死ぬんだ？ 赤竜に連れられたほうがよかったなら自分はただの犬死じゃないか。そんなのはあんまりだ。そんなのは、

「嫌だっ！」

自分でも見事だったと思う。

ハンスは突然前転すると赤竜の股下を掻い潜り、痛みに悲鳴を上げる身体を抱えたままめちやくちやくに走り出した。行き先はない。ただ逃げるのみだ、もう時間稼ぎがどうかとかレイフィーラがどうかとかなんて考えられない。どうでもいい。自分の安全が第一だ。今はただあの恐ろしい亜人から逃れる、それだけだ。

後ろからものすごい風圧が押し寄せてくる。咆哮も聞こえてくる。何ということだ！ 赤竜は自分を生かしておくつもりはないらしい。暗澹とした絶望が身にのしかかり、痛みを増幅させる。また呼吸が乱れて腹が痛くなって余計なことばかり頭を巡って 気が付けばハンスはみつともなく転倒して地べたに寝そべっていた。何と今の

自分は惨めだろう。いつそ殺してくれ、いややっぱり死にたくない！
辺りの空気が唐突に変わった気がした。空気が薄くなって、まだ日は昇りきってないはずなのにいやに明るくて、何だか熱い。近くで火事が起こっているかのようなようだ。ハンスは地べたを転がったまま恐る恐る背後を振り返った。

「グウウウウウウウ……」

見なきやよかった。そうすればまだ何もわからないまま逝けただろう。

赤竜は裂けた口一杯に火球を溜め込んでいた。まさかあれでハンスを焼き殺すつもり……なのだろう。こんなことならまだミンチにされたほうがマシだった。赤竜の口から漏れる熱気と魔力。恐ろしい、失禁してしまいそうだ。

こぼれそうなほどに満ち溢れる火球を含んだまま赤竜は長い首を上げ空を仰いだ。吐き出すのか？ 吐き出すのだろうか。自分はそれを浴びて悶え苦しみながら死ぬのか。嫌すぎる。

走馬灯が流れ始めた。寡黙な父、穏やかな母、幼少期の思い出、修練生時代の出来事、騎士になろうと決めたあの日の出来事、すべて一瞬の内に走り抜けていく。ファイアブレスが目前に迫る。そして自分は死ぬ。自分は。

「汚らわしい亜人め！ よくも我らが同胞を！」

「全員で囲め！ 数で圧倒しろ」

「第一波突撃します！」

「特つつ攻つ！！」

目の前で何が起きているのかわからなかった。火に炙られるすんでのところで自分は抱え上げられ後方の安全な民家まで下げられた。赤銅色の、三角と長方形を組み合わせたような紋章が刻まれた鎧を着た集団が赤竜相手に果敢に剣を振り盾で威圧し闘っている。彼らはハンスのことを「同胞」と呼んでいた。彼らは……グラーナ神殿

騎士団！

「すまない、住民から通報があつてすぐに駆けつけたつもりだったんだが少しばかり遅かったようだな」

「いえ、滅相ないです」

ハンスを庇う形で立っている壮年の男はミゲル・イデフといった。ハンスの直属の上司である分隊長であり、よく見れば今赤竜と闘っているのもハンスの同僚が中心である。それを確認した途端心の内にどつと安堵が押し寄せる。

助かった……。

もうすぐ神殿から神官が訪れて、神聖魔法によつて赤竜を討つだろう。今赤竜は、圧倒的な“数”で攻められ劣勢に立たされている。あちこちに刀傷も見受けられる。赤竜はもうすぐ神官に討伐されるか、撤退するだろう。

「突然街に現れた亜人とはあの竜のことかね？」

「はっ。そのとおりであります」

ミゲルの横に法衣を着た恰幅のいい男が現れた。グラーナ神殿に勤める神官だ。赤竜はその法衣に気付くとすぐに飛び跳ねて後退した。

「ふんっ。数が取り柄の騎士団だけならまだしも、神官にまで出向かれては到底勝ち目はあるまい」

赤竜はみるみるしぼんで、やがてもとの燕尾服を着た爺やに戻った。そして爺やは赤い大きな翼を広げるとはばたいて、宙に浮かび始めた。

「待て貴様っ！ 逃げるつもりか！」

ミゲル隊長が抜いた剣を爺やに向けて、挑発する。しかし爺やはそのに構うことなく高度をみるみる上げてゆく。

「もとより目的はレイ様の保護。よもや貴様らに構う必要はない、だが」

冷たい、それでいて火傷しそうな殺意が明確にハンスに突き刺さった。爺やに睨まれたのだ。あの紅い、修羅場を潜り抜けてきた猛

者の持つ刃物のような鋭い眼で。

「この借りはいつか必ず返そう」

最後にそれを言い残して、爺やはもはやこちらを顧みずレイフィーラが逃げた方角に向けて飛んで行ってしまった。レイフィーラよ、無事であってくれ。今のハンスにはそう祈ることしかできなかった。「今治療してやろう」

恰幅のいい神官はそう言うなり祈祷に移った。ぶつぶつ呟かれる大地神の祈りに耳を傾けながらハンスは長い夜を振り返っていた。治療が終わった後、恐らくハンスは神殿に呼ばれ根掘り葉掘り事情を訊ねられるだろう。もちろんレイフィーラのことについて言及するつもりはない。赤竜のことのみ適当に話すつもりだ。

長い夜だった。生まれてから二度目の生命の危機だった。もう金輪際あんな経験はごめんだ、と心から思った。

しかし自分は何とか生きている。そしてあの黒髪の少女の助けになった……と思う。それだけでもう十分。いちいち過去を振り返る必要もあるまい。

神よ。感謝いたします。

ハンスは今自分の傷を癒してくれている大地神 グラーナ と、自分の瞳と同じ群青色した夜明けの空を与えてくれている天空神 カイラス に祈りを捧げ、静かに瞑目するのだった。

「思ったより長くなっちゃったな……」

夕暮れに染まる空の下、ハンスはハニーブラウンの癖毛をいじりながらそう呟いた。神殿での尋問は予想以上に長引き、結局日が昇りまた暮れるまでにわたって続けられた。そのおかげかハンスは通

常業務に参加することなく、早々に帰宅するよう言いつけられた。そうして今自分は赤銅色の外套を纏ってラニアの街を歩いているわけである。

自宅前にある大きな二つの穴は、しばらく待てば埋め立ててくれるらしい。それまでは放置するように言いつけられているため、ハンスは若干煩わしさを感じながらも回り込んで家の玄関を開けた。

「あつ、おかえりなさい」

清純な清い響きの中に、どこか色香を感じる声。

不安げに俯いていた少女は入ってきたハンスを確認して、パアツと黒い瞳を輝かせた。そのまま期待と不安の入り混じった目でハンスの様子を窺っている。

「レイフィーラ……何で君がここに？」

至極当然な疑問だった。彼女は昨晚、ハンスが逃がしたはずである。それが何の因果でここに、ハンスの家に立っているのだろうか。「逃げる！ って言われても何処に行けばいいのかわからなくて。

しばらく飛んでたらお腹も空いて。帰る場所、ここしかなかったからそれで……」

レイフィーラの声がどんどん小さくなっていく。ハンスを怯えた目で見つめている。見捨てられやしないか、迷惑に思っていないだろうか……レイフィーラ的心情が手に取るようにわかる。

だからハンスは、ちよつとだけ迷ったのちに控えめにレイフィーラの頭の上にポンと手を乗せ、ほんの少しだけ撫でてやった。つやつやの黒髪の手触りは格別ですつと撫でてやりたかったが、レイフィーラが澄んだ目でこちらを見上げているのに気付いて慌てて手を引つ込めた。

「う、ごめん」

「ううん。ありがとう、その……ハンス……」

レイフィーラは微笑んでハンスに軽く頭を下げた。そして顔を上

げて……そこでハンスは彼女の頬に涙が伝っているのに気付いた。

「レイフィーラ、君」

「いやっ、あのこれは……」

レイフィーラはしどろもどろになって、何とか涙をごまかそうとしたがそれとは裏腹にどんどん涙は溢れてくる。

「なんでっ？ どうしてっ……!?!」

慌てふためくレイフィーラを、ハンスは穏やかな目で見つめていた。たまらず嗚咽を漏らす彼女を見守りながらハンスは“これから”を想像した。

きつとこれからハンスは亜人からの襲撃の危険と、神殿から背信者とみなされる危険、二つの危険に晒されるだろう。だがそれもいいと思った。あんな目にあっただばかりなのに現金なものだと自分でも感じるが、それでも自分の気持ちに嘘はつけない。

「とりあえず夕食を食べよう。一人分しかないけど何とかするよ」「でもわたしがいたら、迷惑なんじゃ……」

真っ赤に腫れた目蓋は白い肌だといっそう目立つ。ハンスは笑顔を作り、彼女の肩に手を置いた。

「いろいろあるだろうけど、全部夕食後に聞くから。後のことはそれから考えようよ、ね？」

「ありがとう……」

弱々しく、だが眩しい笑顔をようやく彼女は見せてくれた。ふとハンスの胸に昔聞いた父の言葉がよぎる。

『自分の信じたことをなせ、ハンス。それで感謝されたのならこれほど名誉なことはないだろう』

かくして、ハンスの家には一人の亜人少女が住まうことになったのだった。

2・5 教皇庁にて

不毛だ。

私は会議……そう呼ぶことさえお粗末な“おしゃべり”に付き合
わされている。場所はアウルダム大聖堂に寄り添うように建てられ
ている格調高いレイズィア教皇庁の会議室だ。

円卓に座って会議に参加しているのは私を含め七人。ある一人を
除いて皆一様に豪華な格好をしている。知識人ぶって彼らは懸命に
議論を繰り広げているが、私の目には彼らが頭カラツポで恥知らず
なのを自ら露呈する大馬鹿者にしか見えない。

例えば向かいに三人並んで仲良く座る老害（糞坊主と言った方が
いいか）は、やれ神殿の運営が大変だのやれ教会の新設や亜人討伐
などで費用がかさむ、などとほざいて重税を持ちかけてくる。金は
十分足りているだろうが、馬鹿。お前ら三人の着ている煌びやかな
法衣一着で家が何軒買えると思っっているんだ？ これ以上税を増や
したらさすがの狂信者どもも反乱を起こすぞ、考えて発言しろこの
ナマクラ坊主どもが。

……しかし、悲しいことにこんなどうしようもない屑三人が天空
神、大地神、海洋神を祀る神殿に鎮座する最高司教様なのだ。実力
はもちろろん国内最高峰。まったく世も末、冗談もいいところである。
三司教の意見に内政担当である枢機卿、カリアン卿が、「これ以
上税を上げたら国民が餓死してしまう！ 考えて発言していただき
たい」と冷たく突っぱねた。

当然三司教は口々に非難を並べ立て、カリアン卿もそれに応酬す
る。ガキの喧嘩じゃないんだぞ。やるなら外でやってる無能どもめ
カリアン卿、私はあんたが国民の税でたくさんいる妾 アバズレ
どもの機嫌を取っていることを知ってるんだぞ。表面上どんなに取
り繕ってもあんたもあの三司教と同じ穴のムジナだ。エロ猿はエロ

猿らしく淫売ども相手に腰でも振ってる。

「皆様、静肅にお願いします。今の議題は“降臨祭”についてです。相違ありませんね、陛下？」

「あ、いや、……うむ」

パンパンと手を叩き、聖光神ライジ神殿最高司教兼アウルダム大聖堂最高司教兼司教枢機卿　ご立派な肩書きばかりをたくさん持つ金髪の優男、ルドルフが一触即発の空気を何とか静まり返らせた。彼の横でやたらビクビクしている特徴のない痩せ細った中年が曖昧に頷いた。三司教もカリアン卿もまだ文句は腐るほどあるみたいだったが、ルドルフにっこり微笑まれたきりばつが悪そうに黙り込んでしまった。情けない臆病者どもめ。

だいたいルドルフという男も狂っている。奴は耳が尖ったエルフで、熱狂的な聖光神教信者であると同時に国内を実質的に動かしている最高権力者である。

こいつは独善的で国を自分の所有物か何かとはき違えており、結局内政にしろ外交にしろこいつの意見ばかりが採用されるため今ここで会議を行うこと自体が無駄なのだ。まったく茶番だ、ふざけている。

それにこいつの隣にある一番派手な法衣を着て、一番豪華な椅子もはや玉座といっても差し支えない　に座っている気の弱そうな中年が、あろうことかこの国の最高権力者にして象徴の教皇様なのだ。全くとんだお笑い草である。

気だるさを拭えぬまま窓の方に目を向けようとすると一人の男が目に入った。教皇の左隣に座っている、この場に場違いなほど質素ななりをした、浅黒い肌の精悍な顔つきの男。

聖堂騎士団団長、ギデオ・ジエバ・ジャグライナその人だ。

奴は先ほどから私と同じように、ずっと口を閉ざしている。もっとも私と違って、奴は会議ではいつも眉一つ動かさず黙りこくって

いるのだが。

こいつだけは……正直よくわからない。剣の腕が国内ですば抜けて立ち、もともと砂漠にある異教徒の民族の生まれであることはわかっているがそれ以上のことは何もわからないし、誰も知らない。この能面野郎は醜い欲望や薄汚い感情を口はもちろん、顔にすら出さない。何を訊いても肯定か否定か、その二つの意志しか示さない。不気味だ、非常に薄気味悪い。こんな奴がどうやってあの野蛮で恥知らずな騎士どもを束ねているのか、甚だ疑問だ。

この国の貴族に生まれ、敬遠な聖光神信者を装ってこの明晰な頭脳を活かして今まで出世してきた。弱小な家の出だった自分が今ではレイズィア皇国の外交を一手に任される枢機卿までに上り詰めた自分でもそれはすごいと思っっているが何か物足りない。こんな愚図どもに愛想笑いするような環境に甘んじたくはない。そうは言っても何もすることはできない。苛立つ、非常に腹が立つ。自分は何に対してこんなに憤っているのか。

「 キューミニニア卿、よろしいですか？ 」

物思いに耽っていた外交担当の麗人キューミニニア卿……ソフィアはルドルフの問いかけによって、ようやく円卓に座る六人全員が自分を凝視していることに気付いた。

「 ええっ。問題ありませんわ 」

慌てて取り繕ったものの、場の空気は外の曇天と同じく重く苦しい。反吐が出るが口には出さない。

「 女性にこの議論は少々骨が折れましたかな？ 」

「 いえ、けしてそのようなことは…… 」

カリアン卿の嫌味に同意するかのようになり、三司教が嘲笑交じりに

キューミニア卿に二言三言何かを言った。何を言ったのかは気を払っていなかったたのでわからない。大方どうでもいい侮蔑だろう。「静粛に。キューミニア卿も同意されたため次の議題に移りたいと思います」

ルドルフがまた手を叩き、室内に乾いた音を響かせた。もう誰も口を開く者はいない。

「次は亜人討伐についてです。オークが最近また出没するようになったようでした」

「糞どもが……」

「何かおっしゃいましたかな？ キューミニア卿？」

「いえいえ、何でもございせんわ、オホホ」

上品に笑ってキューミニア卿は口許を押さえた。それを見て、ルドルフは含みある笑みを浮かべ、ギデオはいつも通り沈黙し、カリアン卿はふんと鼻を鳴らし、三司教は下卑た笑いを隠さずに上げる。かくしてレイズィア皇国の重役七人による会議は続けられるのだ。それぞれ腹にどす黒いものを抱えながら。

#03 降臨祭まで

秋というには少し肌寒く、冬というには少し早い季節。いつものごとく夜明け前に家を出て、グラーナ神殿にて朝の礼拝を済ませたハンスは業務に移るべく分隊の面々と共に緩やかな山を下っていた。その表情は明るく、群青の瞳は日光に照らされた海のようにまばゆい光をゆらゆらと携えている。

「お前は運がいいな。騎士になってすぐに降臨祭に参加できるなんてな」

「はい！ とつても嬉しいです」

ミゲルにそう言われハンスも嬉々として答えた。

降臨祭……一年に一度、秋と冬の境目に首都アウルダムにて行われる聖光神体系の信者にとって最大の行事の一つで、今より遙か太古に聖地“日の出づる場所”より降臨した聖光神の使い四人が、“日の沈む場所”より現れた暗黒神 セド のしもべを成敗し、信者たちを救ったという逸話を由来としている。

三神殿の騎士団からは各騎士団長とその団長が厳選した部隊しか参列できないのだが、運よくハンスの分隊は団長が選んだ部隊に含まれていたため、参列することができたのだ。

「俺も騎士になって五年になるが、今年が初めてだぜ」

まだ若いドワーフの同僚がだみ声で嬉しそうに言った。グラーナ神殿騎士団には人間の他に、ドワーフやエルフなど友好的な亜人が所属している。彼らは聖光神体系を信仰している種族なので亜人狩りの対象外となっているのだ。

「でもお前と一緒に住んでるあの娘はどうなるんだ？」

「あ、ああ……大丈夫ですよ。あれでも召使いの娘ですから」

別の騎士から訊ねられ、煮え切らない返事を返す。

レイファイラ……ハンスと同居している亜人の少女は、便宜上レイという名の“ハンスの家の召使い”ということになっていた。ハンスの父がまだ団長だった頃、家にいた使用人の娘だと。訝しむ者もいたが、ハンスの来歴　家系を見ればだいたい納得してくれた。「しかし気の毒だな。まだ若い娘なのに日の光　聖光神様の恵みを賜ることができないなんて」

「大丈夫ですよ。夜中ならほとんど問題ありませんし、日中でも短時間ならフードを被れば大丈夫ですし」

「でもそんな吸血鬼　ヴァンパイア　みたいな生活、さぞ辛かろうよ」

ミゲル隊長が心の底から同情するような調子でそう言った。ハンスは皆を騙している事実に関心を痛めながらも受け答えする。

「まあ彼女も慣れてるみたいですしそこまで不遇だと感じてないでしょう」

「それに、レイちゃんにはハンスがついてるからな」

「なっ
」

同僚の一人が意地悪く言ったその言葉にハンスは絶句する。

「ち、違います！　彼女とは決してそんな関係なんかじゃ　」

「でも若い男女が一つ屋根の下っていうシチュエーションでしょ？　何も無い方が却って不自然じゃない？」

女性騎士まで加わって談義が盛り上がる。仕事柄男が多い職業だ。がまったく女がいらないわけでもないのだ。ハンスは狼狽えながらも一つ一つ同僚の冷やかしに対処してゆく。真剣に答えれば答えるほど同僚の思う壺であるということには頭が回らないようだった。

「でもよ、そのレイさんつつうのは色白でずいぶん美人という話じゃないか。……もしかしてハンス、お前もう“何かしちやっした後”なんじゃないのかあ？」「きゃあ！　それホント？」

ドワーフのルゴデドと女性騎士であるマリヤがしきりに囁し立て、

それに釣られ周りの黙っていた同僚たちまで騒ぎ出した。普段は静かな山の中が、若い歓声によってたちまち真つ昼間の市場か旅芸人のショーの最中のように騒がしくなる。

ハンスは寒さでやや赤くなっていた顔をより紅潮させ、「もうこの話は終わりです！」と言って早足で若干隊列の前方に移動し始めた。無論ルゴデドもマリヤもまだこの初心な新人をからかってやろうと足を速めるが、

「お前ら新人いじりはそれくらいにしておけ。そろそろラニアに着くぞ」

ミゲルの言葉と共に森の出口が見え、同僚たちは渋々元の隊列に戻っていった。ハンスはようやく終わったかと嘆息し、足を緩めて隊列に戻る。

そこにミゲルがすつと近づいてきて、にっこりと、どこか少年のような笑みを浮かべた。

「で、結局どこまで行ったんだ？」

その瞬間、ハンスのあらん限りの叫びがラニア中に響き渡ったという。

「ただいま、レイフィーラ」

「おかえりなさい」

肌寒さに頬を赤くし、鼻をすするハンスをレイフィーラはにこやかに迎え入れた。どうやら今日はかなり上機嫌のようだ。遠慮なく極限まで広げられた黒い翼はパタパタはばたいているし、同色の尻尾も縦横無尽、主の意志を超越する勢いで揺れまくっている。そんな彼女は、両手いっぱいに見るだけで顔をしかめたくなるような、暗い森林の奥深くに陰っているような深緑色の怪しい草を抱えていた。

ハンスは外套を脱ぐと少しでも寒さから逃れるため、居間に放置されている毛布に身を包ませ胡坐をかいて座り込んだ。

「……一応聞いとくけど、また僕のいない間に外を出歩いたの？」

「ごめん」

頭こそ下げたものの、まったく悪びれる様子のないレイフィーラにハンスはやれやれと肩を竦めた。

「君は正体がばれたら神殿に連行されて即処刑なんだよ。本当にその自覚はあるの？」

「うん、わかってるよ。ちゃんとフードを深く被ったし、少しの間しか出歩いてないし、ほとんど口を開いてないし、それに尻尾も翼も角も見せなかったから」

「はあ……もうこれきりにしてくれよ」

「はい。ねえハンス、それより見てこれ、ジャジャーン！
薬草農家のオジサンから貰ったんだ！」

にここに、太陽のような眩しい笑顔でレイフィーラは急に息がかかるほどの位置までハンスに顔を近づけた。昼間あったことを思い出し、ハンスは顔に熱を感じて咄嗟に顔を背けてしまう。レイフィーラは首を傾げたが、すぐに笑顔に戻ってハンスの顔面に両手に抱えた草を押し付けた。

途端、ハンスの鼻腔に強烈な悪臭が流れ込む。

「……って、これシダミ草じゃないか！ 臭いから近づけてくるなよ……！」

ハンスは鼻をつまみ、レイフィーラから距離を取る。シダミ草は万病に効くと言われ、料理や薬の作成などにも使われるというまさしく万能な薬草だ。しかし、あまりに臭いがキツイ。ハンスは吐き気を堪えながら涙目で、キョトンとした表情のレイフィーラを睨んだ。

「どうして？ こんなにいい匂いで美味しそうなのに。………ぱくっ」

「生で食べるな！」

ハンスは自由すぎるレイフィーラの行動に頭を痛めた。心なしか眩暈までする。彼女が家に来てからというものの、ハンスは振り回され、冷や冷やしっ放しであった。当のレイフィーラはもくもくとシダミ草を咀嚼している。記憶はまったく戻る気配を見せないというのに呑気なものだ。

ふと、レイフィーラと目が合った。

ぶつかり合う黒真珠と群青。先に目を背けたのはハンスだった。顔が熱くなって、心臓の鼓動まで気になる。ハンスはそんな自分の様子を誤魔化すべく、

「も、もうすぐ降臨祭で家を空けなきゃなんないんだ」

そう告げると、夕食の準備に取り掛かるべく立ち上がった。

「出発は二日後。きっかり二週間は戻らないだろうからそのつもりでいてくれ」

「えっ……？」

今度はレイフィーラは驚愕とした表情を浮かべた。手に抱えていたシダミ草が床に散らばる。

「……じゃあ、わたしはその間お留守番なの？」

「うん。そうなるな」

レイフィーラはそれを聞いて「ええっ！」と大げさに驚いた。その拍子に床に散らばっていたシダミ草に足を滑らせ、尻餅ついて転んでしまった。仕方なくハンスは彼女に近づいて手を貸してやる。

レイフィーラはハンスの肘を掴んで一気に立ち上がると、彼の両肩を鷲掴みにして前後に大きく揺さぶった。

「ハンスがいない間ご飯はどうするの！？ 誰か訪ねてきたらどうするの！？ また前みたいなの刺客が来たらど・う・す・る・の！」
「痛い痛い！ 落ち着けレイフィーラ！」

レイフィーラはハンスの悲痛な声を聞いて、はっとした顔をして

急にハンスを掴んでいた両肩から手を放した。ハンスはその勢いを殺しきれずゴロゴロ転がって壁に激突した。

「ごっ、ごめんなさい！ わたし、また」

「いいよ……僕ももう慣れた」

ハンスは上着を脱いで自分にできた傷を確認した。両肩がうつすら青くなっているが……来た頃よりはだいぶマシだ。思えば彼女がここに住むようになってから一か月近く経つ。最初の頃はコップや皿などの食器を力加減を間違えて粉々にされたり、スキンスリップ程度に軽く小突かれた程度で吹き飛ばされて壁にひびを入れてしまったりと大変だった。

「ごめんね。ハンス……」

しょんぼりとしたレイフィーラを見てみると、まあいいかという気持ちになってしまふ。それで毎回、ついつい許してしまうのだ。

レイフィーラは可愛いがとても手のかかるペットみたいで、不意にハンスは昔親に内緒で飼っていた仔猫のことを思い出した。

「大丈夫だよ。最初ここに来た時よりずいぶん力加減がマシになっているし。ほら、最近食器も壊してないだろ？」

「うん……」

未だ元氣を取り戻さないレイフィーラを見て、ハンスは彼女の頭の上に手を乗せぐしゃぐしゃに撫でた。レイフィーラは目を白黒させしばらくハンスをただ見つめていたが、

「子供扱いしないでよ」

ようやくハンスの手を振り払い、むくれながらそう言った。白い頬が若干赤らんで膨らみ、黒く線のやや細い眉が吊り上っている様はまさしく子供そのものなのだが。

「そんだけ元氣があれば大丈夫だよ。ご飯ならシダミ草があるし、できるだけ早く戻るから何とか留守番頼むよ。ホラ、お土産も買って帰るしさ」

不満げな表情を浮かべたレイフィーラは何とかハンスに食い下がろうとするが、それも叶わず散らばったシダミ草を拾い、口に含ん

だ。

「だから食べるなって！」

「だってハンスいない間のご飯、これしかないじゃん」

「シダミ草の料理教えておいただろ？ ほら、それ調理するから持つてこいよ」

ハンスはシダミ草をレイフィーラから受け取り、水を入れておいた鍋に加えてかまどの火にかけ始めた。

「こつやって煮ればそれだけでだいぶ違うんだよ……。一応他の食材も買つてはあるけど、足りなくなったら日が沈んでから買い足してくれ」

「……はあい」

仕方なく、といった様子でレイフィーラは首を縦に振った。何とか説得することはできたようだ。まあもつともハンスが外出している間にレイフィーラがこの家を出ていってしまう可能性だってない訳ではないが。

「早く帰ってきてね？」

不意に、レイフィーラがハンスを覗き込み首を傾げた。心臓が止まる気がして、ハンスは後ずさる。

レイフィーラの瞳は恐ろしい。その威圧でハンスを圧倒したかと思えば、類稀なる美麗さでハンスの心を捉え離さない。ハンスの脳が、身体が、魂がすべてレイフィーラに見透かされているように感じる。

これから二週間レイフィーラと離れることになるが、その間はずつとこの瞳の魔力に囚われ続けるだろう……。ハンスはそう感じ、再びレイフィーラに向き直った。

「二週間……。長いけれど、待つてくれるか？」

何故か急に不安になって、ハンスはレイフィーラに訊ねた。愚問だとわかっていてもそうせずにはいられなかった。

「ここ以外、わたしには行くところがないよ」

レイフィーラはハンスの心情を汲んだのかは知らないが、優しく微笑み返した。そして背伸びをし、更に若干はばたいて背の高いハンスの頭に手を置くとゆっくり撫で始めた。

「さっきのお返しね」

「ははっ……」

何だか急に疲れが取れたような気がして、ハンスの顔が自然に緩んだ。さっき感じた不安が馬鹿らしく思える。

「やべっ、鍋吹きこぼれてるよ！ レイフィーラ、鍋早くテーブルに移して！」

「あ、うん って熱っ！」

「ああ、直接鍋を持ったら火傷するに決まってるじゃないか！」

やっぱり留守番を任せて大丈夫か……？

そう感じつつハンスはレイフィーラが抱えた鍋の取っ手を持ち、机まで運ぶのだった。

出発の日。“日出づる場所”より昇る夜明けの太陽と、ラニア中の人々に見送られてグラーナ騎士団一行は旅立つ。

騎士は皆赤銅色の鎧を纏い、三角形と横長の長方形を重ねた紋章が描かれた同色の旗が朝のそよ風に揺れている。あちらこちらにある馬車の中に、最高司教を始めとするグラーナ神殿に名だたる神官と騎士団の重鎮たちが同席し、下っ端騎士がそれを取り囲むという構図だ。

「どうか大地神のご加護のあらんことを！」

街中の人々が一齐に膝まづき、祈りを捧げる。

「敬遠なる諸君にも大地神のご加護があらんことを……！」

グラーナ神殿最高司教が、赤銅の“地味”な法衣をはためかせ、

高らかにそう告げる。無欲にして質実剛健、この最高司教は大地神
信仰者から厚い信望を得ている。無論ハンスもその内の一人だ。

「司教様、ちょっと前に教皇庁で行われた会議に参加されたばかり
なのにまたアウルダムに出向かれるなんて……」
「お身体に障らな
いだろうか……？」
「司教様は我々のために頑張っておられるのだ
！」

街中の、いや騎士団の内部からも最高司教をいたわる言葉が聞こ
える。これもまた彼の徳がなせることだろう。

「それじゃあ行ってくるよ。……レイ」

ハンスは目前に立つ土色のフードを目深に被った少女……“召使
いの娘”に微笑みかけた。

「いつてらっしゃい。……ハンス様」

彼女もまた、美しくどこか淫靡な声で“主人”に頭を下げた。フ
ードから窺える血色のよい唇の端がやんわりと上がり、上品な笑み
を形作った。ミゲルを始めとする分隊の面々がにやにや誤解に満ち
た眼差しを二人に投げかけたが、気にしないことにした。

「出発……！」

そしてグラーナ神殿一行は関所の門を抜けて、アウルダムに続く
曲がりくねった国道を規則正しい列をなして行軍を開始した。暖か
な日の出の淡い光を、あちらこちらの赤銅色の鎧が七色に反射し幻
想的な風景を作り上げている。

ハンスはレイフィーラの微笑みの意味を知らなかった。もし仮に
彼女がフードを被っていないのなら、きっと彼は彼女がしよ
うとしたことに気付いていただろう。彼女が浮かべていた笑みは悪
戯を思いついた時……ハンスを困らせるようなことをしようとして
いる時のそれだったからだ。

「さーて。……わたしも準備しよつと」

レイフィーラは余韻に浸る街中の人々を潜り抜けて、自宅へと戻
り始めた。彼女の翼と尻尾は、フードの中で苦しそうに蠢いていた。

#04 首都アウルダム

レイズィア皇国首都アウルダム。

もともとこの都市はそれだけでひとつの国家だった。それが約百五十年前、この地方で起きた大規模な宗教戦争が終結し、結果として小さな都市や国家がいくつも結び付いてレイズィア皇国が形作られた。そのため国としての歴史は浅くてもこのアウルダムの歴史は長いのだ。

西側にある正門を潜って、街の東へと続く巨大な通り 夜明けの道 を進んでいくと大陸一との呼び声高い噴水を持つ街の中心であるアウルダムの広場があり、さらにその奥、 夜明けの道 の終着点には世界最大にして最高峰の美しさを誇るアウルダム大聖堂がそびえ立っている。そしてその聖堂に寄り添うようにして両隣にレイズィア教皇庁、聖堂騎士団本部が据えられている。広場から南の小通りをずっと進んでいけば騎士を養成する修練場や一般市民の住む地域に通じるし、北の通りに行けば神官を育む学校や貴族の屋敷群につながる。

これらの建物はすべて聖光神体系の象徴である“日の出”をもととする白を基調に、聖光神 ライジ の腹心である三母神をイメージした赤銅・濃紺・空色の三色を加えて配色されていて、驚くことにこの街の外観はアウルダム正門から広場を経て、大聖堂まで続く夜明けの道 を中心線にして、左右対称になるよう配置されているのだ。

だからハンスは何度見てもこの都市に魅了され、圧倒されてしま
う。

「おいハンス、ぼうつとしてないで早く入れ」

「あっ！ はい、すいません」

ミゲルに急かされようやく夜明けの道と国道を隔てる巨大な門を潜った。この門にも神々と悪魔との戦争をモチーフとした彫刻が刻まれていて侮れない。この街はどこまで美しければ気が済むのだろうか。

グラーナ神殿一行がゆったりと歩みを進めると、夜明けの道に沿った露店の商人たちも、一般市民も神官や神父らしき人物も、降臨祭に参加すべく国外より訪れた者でさえも 皆が道の両端に散ったかと思うと膝を地につけて瞑目し、祈りだした。ハンスはその光景に圧巻し、落ち着きなく周囲を見回し始めるが、

「馬鹿、少しは落ち着け」

ミゲルに小突かれようやく落ち着きを取り戻した。よく見れば他の分隊の騎士はもちろん、ハンスと同じく参列が初めてのドワーフのルゴデドや女性騎士のマリヤでさえ、緊張した面持ちではあるものの取り乱した様子はなかった。焦ってパニックになったのはハンスただ一人だったのだ。その事実にはハンスは赤面する。

やがて広場に辿り着くと馬車から降りた神官は左の神学校側へ、騎士団は右の修練場側へ別れた。そしてしばらく鮮やかな原色を巧みに使い分け舗装されている地面を進むと、ハンスの目に懐かしの修練場が飛び込んできた。一人の騎士に憧れ、彼を指して懸命に訓練した昔を思い出す……。ハンスは妙にむず痒い気持ちになって、騎士たちに喋りかけているグラーナ騎士団長の方へと視線を移し、その話に耳を傾けた。

「今回の参列では非常に運よく、ただ一度も亜人や魔物に襲われることもなく無事にこのアウルダムの地に赴くことができた。これもひとえに大地神様のご加護あってこそだ」

他の騎士にならってハンスも瞑目し、大地神に祈りを捧げた。願わくば、このまま何事も起こらないで無事に降臨祭を終え、ラニアに帰還したいものだ。

祈りを終え、目を開けると再び団長が語り始めた。

「三日後に教皇様やルドルフ殿の演説が行われる訳だが、我々が警

護の任や周辺の警備にあたるのは明日からだ。つまり今日一日、諸君らに空き時間ができたわけだ。私としても普段頑張っている諸君らにせめて今日くらいは体と心を休めてほしいと思っっている。」

周囲がざわめき立つ。かくいうハンスもこれから後に続く言葉に期待を膨らませていた。現在時刻はまだ太陽が天頂近くに昇りきる前……すなわち昼前だ、一日を潰すには十分すぎるくらいの時間がある。

「よって、今日一日は特別に休暇を与えよう。諸君らも一年に一度、この季節にしか行われないこの祭典を存分に楽しむとよい」

おおおおおおおおお！！

騎士団中に歓声が溢れかえった。それらはすべて大地神に対する感謝や団長に対する賛辞、それにただの喜びの雄叫びである。

「落ち着きたまえ、諸君」

団長が手で部下を制す。途端に歓声は幻のように掻き消え、修煉場前は静粛に包まれた。せつかく休みを頂くんだ、感謝の念を込めていつも以上に行儀よくせねば……！ ハンスは姿勢を正し団長の一挙一足に注目した。団長は珍しく苦笑を浮かべながら、

「羽目を外しすぎず、神への祈りを忘れるんじゃないぞ？ ……では解散」

そう言った途端に騎士たちがでんでんばらばら、まるで蜘蛛の子を散らすように駆け出していった。後に残ったのはハンスら機を逃した一部の騎士と、団長ら別件で仕事のある重役のみだった。ハンスは啞然として、ポリポリと癬毛頭を掻いた。

「なあ、一緒に回ろっぜマリヤー！」

「お断り。せつかく首都まで来たんだからいい男を見つけないきゃ」

近くではルゴデドが短い手足を必死に動かしながら、何とかマリヤと休日を過ごそうとあの手この手躍起になっている。ハンスがそ

の様子を見て苦笑していると、

「お前は回らないのか？」

ミゲルがそう訊ねてきた。彼もドワーフ男性と人間女性の掛け合いをにんまりしながら見守り、顎に生えるうっすら青い無精髭をさすっている。

「はい、回ります。ただ少し機を逃したただけで」

「やっぱレイちゃんがないと寂しいか？」

「違います！　というかそれとこれとは関係ないでしょう！」

ハンスが反論してもミゲルはガハハと豪快に笑うばかりでまったく取り合わない。ミゲルは仕事上では非常に頼りになるのだが、どうも無意識に人をからかう癖がある。ハンスはこの分隊長を信頼しているが、同時にこういう子供っぽい面を苦手ともしていた。

「隊長は回らないんですか？」

「ああ、俺は団長と一緒にカイラス神殿騎士団やデュプト神殿騎士団の連中んところに行かなきゃなんないんだ。俺も久々にアウルダムを堪能したかったんだがね」

肩を竦めてそう言ったミゲルに、ハンスも「それは気の毒ですね」と相槌を打った。

「それじゃ、僕も行きます」

「ああ、ちゃんと愛しのレイちゃんにお土産買って行ってやるんだぞ！」

「もう、勘弁してください！」

ハンスが逃げるように広場に向かっていくのをミゲルは笑って見送った。その後方では未だにルゴデドとマリヤの掛け合いが続いていた。

広場に出たハンスはこれからどうしたものかと、噴水を眺めながら思考していた。この大聖堂前の往來は眩暈がするくらい大量の様々な人々で溢れかえっていた。これも聖光神体系を信仰する人口の

表れだろう。

赤銅や濃紺、空色の鎧を着た騎士たち。どこぞの教会の神父らしき中年エルフ。みすばらしい服を着ながらも堂々と歩くドワーフの集団。泉の前で何やらシルクハットを観客に見せ、これから手品を行おうとしている白塗りの化粧を施した大道芸人。後ろの席ではしゃぐ子供。一番前の席で懸命に芸人の手許を見つめる土色のフードを被った少女……、

「て、レイフィーラじゃないか！」

ハンスの叫びは幸いにも、街中の喧騒が掻き消してくれた。レイフィーラはこちらに気付く様子なく大道芸人のシルクハットを注視している。ハンスは他の観客の迷惑にならないよう気を払いながらそつとレイフィーラの背後に近づき、「何してるの？」と声をかけた。

レイフィーラは滑稽なくらい跳ね上がってこちらを振り向くと、今一度飛び上がって驚いた。

「は、ハンス！ 何でここに！？」

「それはこっちの台詞だよ。何で君がここにいるの？ 留守番は？」
ハンスの問いに答えず、レイフィーラはフードを深く被って素顔を隠した。覗き込もうとすると慌てて顔を背ける。埒が明かないのでハンスはレイフィーラを引っ張って人気のない路地の隙間に連れ込んだ。

「……怒らないから、何でここにいるのか教えてくれないかな？」

ハンスは努めて優しい声色で、諭すように訊ねた。

「えっと、一人でいるの不安だったし……何だかハンスの行くところ楽しそうだったし……ハンスがいないとつまないし、だから、後ろからこっさり、その……着いてきちゃったの」

レイフィーラはおずおずとそう語った。ハンスはラニアからアウ

ルダムに向かうまでの道程を思い出して、妙に納得した。

なるほど、巫人にも魔物にも襲われない訳だ。目の前の少女は巫人としてはやんごとなきご身分だ。それにその実力、風格はハンスもよく理解している。こんな少女が神殿一行の近くにいては、並大抵の魔物は迂闊に手を出せなくなってしまうだろう。つまりハンスたちグラーナ神殿一行が無事に来れたのは大地神 グラーナのおかげではなく、目の前の少女のおかげ……だったのか。

「本当によく着いてきたもんだね。ここ、行きだけで五日ぐらいかかるのに」

「ごめんなさい……」

あからさまにレイフィーラは肩を落としてしょんぼりとした。本当にはた迷惑でずるい少女だ。こんなしおらしい態度を取られるとハンスも怒るに怒れなくなる。

「まったく、しょうがないな……」

「怒ってないの？」

恐る恐る、といった表情でレイフィーラはハンスを見上げる。ハンスは目が合ってしまったかわらないよう表通りの方に目を背けた。

「そりゃあ、まったく怒ってない訳ではないけどさ。でも来てしまったものはどうしようもないじゃないか。それに、君を置いていった僕にもほんのちよびつとだけ責任はある訳だしね」

ハンスがそう言ったのを、レイフィーラはまだ不安が残っているような表情で見つめていた。……何だかハンスが悪いことをしたような気分になる。何とも気持ちの悪い、居心地の悪い空気が二人の間に流れた。

「……そうだ、せっかくだし少し街中を回ろうか？」

いたたまれなくなつてそう提案しただけなのだが、落ち込んでいたはずのレイフィーラは急に元気になって、ハンスの手を取った。そして人間離れた速度で走り出すとそのまま路地を飛び出した。

ハンスは身体が浮遊するのを感じて、思わず間抜けな悲鳴を上げてしまった。

「わわっ！ 少しは落ち着いてレイフィーラ！」

「だってわたし、回りたいたこたくさんあるんだもん！ 早く行こっ、ハンス！」

心底楽しそうに、無邪気に笑うレイフィーラを見ると何だかこっちも楽しくなってくる。他の騎士にできる限り見られたくない状況だが、まあいいかとどんどん樂觀的になっていく。いいじゃないか今日は休日だ。レイフィーラにうんと付き合っつてやるのもいい。

子を持つ父親はこんな気持ちで子供と接するのだろうか、そんな他愛のないことをぼんやり考えながらハンスはレイフィーラに引張られるがままに走るのだった。

……夕暮れは、聖光神体系の信者にとって不吉とされている。

日没は暗黒神 セド の象徴であるからだ。

よってどんなに賑わいを見せる街並みも、日の入りには嘘のように静まりかえる。アウルダムのは昼間の人の束を失い、代わりに夕焼けの赤い光が閑散とした広場を照らしていた。その只中に、二つの影法師。ハンスとレイフィーラは夕闇に染まりゆく広場を横切り、修練場方面へと向かっていた。

「思ったより時間を食っちゃったな」

ハンスは夕焼けを見つめながら呟いた。時刻はまだ十七ノ刻だが、もう人はほとんどいない。この街……特にこの時期にいる人々は敬遠な神のしもべばかりだ。すでに皆、屋内に入っているのだろう。

「今日は楽しかった？」

「うん！ すっごく、とつても、うん　んと楽しかった！」

レイフィーラは夕日を浴びて身を紅くしながら両手をいっぱい広げてその喜びを表現した。ハンスは呆れ半分喜び半分といった複雑な表情を浮かべ、ずっしり重いため息をついた。

焼き菓子八つ、りんご七個、ランナの花蜜に漬けたパンが五個、そして炙った肉の串三本が今日、レイフィーラの胃袋へと消えていった。“楽しみ”の代償はあまりにも大きかったのだ。

今月の給金はすべてパー、来月までシダミ草をメインとしたしけた食事が延々と続く羽目になるだろう。まあでも……、

「ありがとうハンス！ ホントに楽しかったよ！」

たまには浪費も悪くない。

ハンスは何とも形容しがたい、だが晴れやかな気持ちになっていた。今は降臨祭、一年に一度、地上にかつて舞い下りた神の使いに祈り、感謝し、そして祝う祭典なのだ。神とてこんなちっぽけな娘と青すぎる騎士にいちいち目くじらを立てまい。

ハンスは横にいるレイフィーラという存在に……ほんの少し、ほんのわずかだけ感謝して、夕闇を歩いていく。三日後に行われる式典を想像しながら……。

#04 首都アウルダム（後書き）

少し修正）というよりは加筆（しました。

#05 鍛冶職人のワン

夕日がほぼ沈み、夜の帳が下りようとしている最中、ハンスは昼間の余韻に未だ浸るレイフィーラをある場所まで連れていっていた。

「ねえハンス、どこ行くの？ 結構広場から歩いたけど」

「僕の知人の家さ。君、また泊まる場所がないんだろ？」

「そうだけど……。でも、わたしもハンスが泊まる場所に泊まらせてもらっちゃダメなの？」

レイフィーラは不思議そうにそう訊ねた。もう慣れたがやっぱりまっすぐな瞳を正面から受け止めるのはつらい。

「僕はアウルダムにいる間、騎士の修練場にある宿舎に泊まることになってるんだ。そこは騎士団関係者以外立ち入り禁止だから」

「でも、わたしハンスと同じ家に住んでるんだよ？ 関係者じゃないの？」

「ああもう、その、何ていうか……と、とにかく君は僕と一緒に泊まることはできないの！ だから今から行く場所に君は泊まるんだ。いいね？」

「あ、ちよつと」

レイフィーラがまた何か訊ねようとする前にハンスは歩行速度を上げて鮮やかな色の石畳の上を歩き出した。レイフィーラの質問にいちいち答えていると身が持たない。酷かもしれないが三日後の式典のことを考えると、彼女は誰か信頼できる人物に頼んでおくのが一番いい。むろん、自分一人で彼女の面倒も見られればそれに越したことはないのだが……。

ハンスは他力本願な自分に苛立ったが、このやるせない気持ちをぶつける矛先を見つけられず、ただより一層歩みを速くしてレイフィーラを困らせてやることしかできなかった。

ハンスの目的地である「ワン工房」は、修練場からさらに南下し

た小売店や様々な工房が集まる 二番街通り の隅っこにひっそり構えられていて、広場から二十分ほどかかった。この周りが廃れた工房だらけの場所にハンスの友人は存在しているのだ。

「何だかここ、かなり汚いけど……？」

レイフィーラが指差した工房は壁のところどころにひびが走り、すすけた白い塗装は剥げていて、看板が傾いた小さな二階建ての建物だった。

「大丈夫。中はわりと綺麗なはずだから」

不安そうなレイフィーラにそう言うと、ハンスは「ごめんくださいーい！」と大声で『休業中』と書かれた戸を叩いた。ばたばたと音がしてしばらくすると、

「うるせえなあ！ 表の文字が見えねえのか糞野郎！」

バタンツ！

ドスの利いた怒鳴り声が響いたかと思うと、急に勢いよく丸い扉が開かれた。ハンスは扉に頭をぶつけてしまった。

「やだっ、誰かと思つたらハンスちゃんじゃない!？」

扉から出てきた声の主は、短い黒髪に黄色い肌で狐目の、東方人の男だった。

男は頭を抱えてうずくまっているハンスに気付くと、急に柔らかい女口調に変えた。そうしてにこにこしながら、起き上がるようにしていたハンスの首筋に絡みついた。

「やだっ、ハンスちゃん久しぶりい！ 立派な騎士になっちゃってえ、もう」

「苦しい……離れる、ワン」

ハンスは無理やり抱き着いてきたワンのヒョロヒョロした身体を振り払うと、立ち上がって鎧に付いた埃を払い落とした。

「レイフィーラ、この人が僕の友人のワン・トウースリだ。胡散臭い名前だけど鍛冶の腕は本物だから」

ハンスの紹介を受けると、ワンは訝しげにきよとんとしているレイフィーラにゆっくり近づきその姿をじっと、舐めるように観察した。もともと細い目をさらに細めてしばらく彼は「うーむ」と唸っていたが突然、

「やだあ　っ！？　ハンスちゃんに女の影え！？」

と大声で叫んだ。レイフィーラは突然の大声にびっくりしてハンスの背後に隠れてしまった。

「落ち着いてくれ、ワン。レイフィーラが怯えてるじゃないか」

「だってだって……！　その人はハンスちゃんの恋人なの！？」

ワンは驚きと興奮がまじったような様子でハンスにそう訊ねた。ハンスは投げやりに、

「違うよ！　この子をワンにしばらく預かってほしくて連れてきたんだ」

ハンスの言葉にワンはきよとんとした顔で、レイフィーラを見つめた。レイフィーラも彼を見つめ返す。しばし見つめ合う……。

「ええっ！？　何を突然！？」

ワンは細い目を見開いてレイフィーラから距離を取った。

「無茶な頼みだとは分かっている。でも話だけでも聞いてほしい」

戸惑うワンに対してハンスはきっかり九十度、頭を下げた。そして黙して動かず、じっとワンの対応を待つ。頼みごとをする際にもっとも効果的な手段である。

「……まあ、と、とりあえず上がりなさいな」

ワンは動揺しながらも仕方なく扉を開き、身を翻して中へと入っていった。ハンスとレイフィーラもそれに続く。

ワンの家の一階はすべて仕事場である工房になっている。鍛冶屋の命である炉が部屋を中心に陣取り、専門の器具や原材料となる鉄鉱石や金属が部屋中の至るところに一見不規則にしまわれている。

そして失敗作と思わしき武器たちが詰め込まれた箱が部屋の隅に乱雑に置かれて、散らかっていた。

ハンスは鍛冶屋特有の金属臭い、暑苦しい空気に顔をしかめながら階段を先行くワンの後に続いた。レイフィーラはふらふらもの珍しそうに、炉に足を踏み入れそうだったので手を引つ張って連れて行った。

「訳ありなんですよ？」

二階にある居住用の狭苦しい部屋にハンスたちを座らせたワンは、茶を二人に振る舞いながら開口一番そう訊ねた。

「まあね。ところでワン、君は亜人狩りについてどう感じてる？」

「別に。まああれがなくなったら、アタシたちみたいな職業は商売あがったりだから居なくなったら困るかしら」

「じゃあ、別に亜人そのものに抵抗はない訳だな？」

「まあ……」

曖昧に、ワンは頷いた。彼は東方出身でこの地にあまり縁がなく、亜人狩り中立派が多い鍛冶神　ロイデ　の信仰者であるため、純粋な聖光神体系の信者ほど驚かないだろう……ハンスはそう考えたのだった。

「とりあえず、彼女の姿を見てくれないか？」

ハンスはレイフィーラのフードを脱がせた。レイフィーラの流麗な黒髪がさらさらと揺れて、頭部にひそやかに生えている二本の角が露わになった。

平静を保っていたワンだが、さすがに目の前に亜人がいることを知ると驚き、壁際まで後ずさった。

「ハンスちゃん……！　その娘、まさか亜人なの？」

「うん。わたしはレイフィーラ。ホラ、角だけじゃなくて翼も尻尾もあるんだよ！」

ハンスの代わりに、レイフィーラが自ら答え、ご丁寧に服の隙間から黒い鱗に包まれた尻尾を振って見せた。もともとレイフィーラはあまり人見知りをしない性格らしく、どんどん初対面のワンに近

づいてゆく。ワンはたまげたとわんばかりに口を開き、へなへなと壁伝いに座り込んでしまった。

それを見てハンスはやはりワンにレイフィーラを預けようとしたのは間違いだったのかと思ひ、ため息を吐いた。ワンはきつとハンスのことを教会に告発したりはしないだろう。だが、それでもかなり悪い印象を持たれたに違いない。これからレイフィーラをどうしようか？ 街外れにある安宿にトラブル覚悟で入れるしかないのだろうか？

「ワンダフルだわっ！」

思考の海に沈みかけたハンスを引き上げたのは、先ほどまでと打って変わって明るい調子で声を上げたワンだった。見れば彼は細目を珍しく一杯に開き、戸惑うレイフィーラの手を取ってじつと彼女を見つめている。

ハンスが予想外の展開に目を白黒させていると、ワンはにこやかにレイフィーラの頭を撫でながらこう語り始めた。

「彼女の角、尻尾を包む黒い鱗……どちらも最上級中の最上級、とーっても素晴らしい素材よ！ これを使って武器を作ればきつとアシの中で歴代最高峰の逸品ができるに違いないわっ！！」

「ちよっ、ちよっと待ってくれワン！？ 彼女をどうするつもりだ！？」

ハンスは怪しげな笑いを浮かべるワンと、彼の言った言葉を理解しきれず首を傾げているレイフィーラとの間に慌てて割り込んだ。

「ねえハンス、わたし武器にされちゃうの？」

レイフィーラがハンスの裾を引っ張りながら訊ねる。

「君は黙っててくれ！？」

ハンスはやけくそ気味にそう叫ぶとワンに向き直った。彼は真剣なハンスを見つめたまま固まって やがてプツと噴き出すと腹を抱えて笑い出した。突然のワンの奇行にハンスもレイフィーラも固

まっつてしまっつ。

やがてワンは笑いをようやく抑えると、目許の涙を拭きつつ黒髪を掻き揚げた。

「ごめんごめん、冗談よ、冗談。ハンスちゃんつてば顔を真っ青にして慌てるんだもの、あー面白っ。ホント、ハンスちゃんは修練生の時と変わってないわね」

「じゃ、じゃあ僕をからかったのか？」

あくまで真面目に訊ねるハンスに、再びワンは細い身体を振動させて笑い出した。何故だかレイフィーラまで、尻尾を振って翼をバタバタはためかせながら笑いこけている。

……何だか気分が悪い。ハンスは近くで可愛らしい嬌声を上げていたレイフィーラの手首をやや強引につかむと、「世話になった。帰る」とだけ言って踵を返した。

「ああ待つて！ 軽いジョークじゃない、落ち着いてハンスちゃんちやあんとアタシが、レイフィーラちゃんは預からせてもらうから安心しなさい」

「……本当に？」

ハンスが訝しげな表情でそう訊ねたのに、ワンは首を大きく縦に振って肯定した。

「任しときなさい。まあアタシ自身、騎士様の武器を作る身として斬られる側である亜人の特徴も見ておきたいからね」

「そ、そう……」

ワンの言葉にハンスは複雑な感情を抱いた。彼の言う通り確かに姿はいくら人間でも、性格も人間臭くても、レイフィーラは本来斬られる対象である亜人なのだ。

ワンと知り合ってからこれ五年にはなるが、未だに知らないことはたくさんある。何故アウルダムに来たのかもわからないし、鍛冶の腕はどこから学んだものかもわからない。彼の年齢でさえはつきりとは分からないのだ。

ワンはこう見えて聖堂騎士団の御抱え鍛冶職人の一人でもある。

東方から来た放浪民の一人に過ぎなかつた彼がここまで成り上がったのはひとえにその鍛冶の才能のおかげだ。

今みたいな笑えないジョークや皮肉をよく口走り、おべっかを使うことができないのが彼の欠点である。しかしハンスはそんな嫌に正直で、本当は親切な彼だからこそ信頼できると思っっている。こうして無茶を承知でレイフィーラを頼みに来たのも彼ならきつと引き受けてくれるだろうと信じていたからに他ならない。

「レイフィーラ、ちゃんと迷惑かけないようにするんだぞ」

「わたし、子供じゃないよ。ハンスはいつもわたしを子供扱いする……」

レイフィーラはそう不満げにむくれながらも、

「ワンさん。三日間、よろしく願います」

ワンに対して礼儀正しく、そしてどこか優雅に一礼した。どちらかといえば女性よりの人格のワンだがレイフィーラに対しては顔を熱くして、

「いいわよそんな……かしこまらなくて！」

と両手をぶんぶん振りながら言った。心なしか声が上ずって聴こえる。

飄々としているあのワンですら懐柔させるとは、やはりこの少女は底が知れない。

ハンスはその様子を見てどうやら唯一の懸念材料であったレイフィーラも大丈夫だろうと安心し、嘆息した。そして座りながらゆったり東方原産の熱い茶を飲んでみるとワンに肩を叩かれた。

「ハンスちゃん、ちょっといいかしら？」

「何？ 別にかまわないけど」

ワンは扉を開き、そこにハンスを促した。ハンスは不審に思いながらもレイフィーラに茶を飲んでおくよう言いつけてワンとともに居間を出た。

階段を下り、再び暑苦しい工房の炉の前まで行くと、ようやくワ

ンは立ち止まった。

「話があるんだろ？ 時間がないからすまないけどできるだけ早く頼むよ」

「ハンスちゃん、あの子をずっと匿い続けるつもり？」

突然、ワンの雰囲気が変わった。優しげに笑みの形を作っていた細目は引き締められて鋭く吊り上り、いつもハンスの前では絶やさずことなく浮かべている微笑も消えて真剣な表情になっていた。ワンのこんな顔は初めて見たが、なかなかどうして恐ろしい。普段の飄々としたワンのイメージが強いからだろうか。

ハンスは本能的に息を飲んだ。身体から滲み出る冷や汗が、工房内の熱された空気をじんわりと冷やし、ハンスの身体を震わせる。

「どうということだ？」

「あの子、竜人 ドラゴンニユート でしょ？ それもかなり身分が高いみたいだし…… どういう事情だか知らないけど、ハンスちゃん。あなた今、とつても危険なことをしてるのよ」

諭すようでないながら有無を言わせない強い口調。ワンの目は狩りをする肉食獣のように、鋭く細められた。

「レイフィーラは一か月前、僕が保護した。どうやら何者かに追われているらしくて、追っ手らしき竜人にも襲われた。今は記憶喪失みたいだから詳しいことはわからないけど…… 僕は彼女を無下に追いつつもりはしないよ。行くあてのない、命の危機にすら晒されている彼女を放っておくことなんてできない」

「……それは、あの子を愛してしまっただから？」

ずきん、と胸に騎士^{ランス}槍を突き立てられたかのような錯覚に襲われた。無骨な刃がみるみる、ハンスの心の最深部目指して入り込んでいく。今まで言わなかった、言葉にできなかつた思いが抉られていく。

何で自分はレイフィーラを保護しているのだろう。一緒に住む義理なんてなかったはずなのに、あの時の自分は彼女を…… 守ろうとして、そう思って、彼女を家に迎え入れるという選択肢を選んだ。

追っ手らしき赤竜に殺されかけたのに。騎士団や教会に彼女の正体がばれば自分は即打ち首か貼り付けだというのに。

それなのに危険な茨いばの道を選んでしまったのは、彼女を愛しているから？

「わからない……」

結局、ハンスには答えを出すことができなかった。ワンは黙ってハンスを見つめている。

ハンスは迷いながらも何とか自分の気持ちを言葉にしようとした。「でも、僕は彼女の力になってあげたいと思ってる。これは紛うことなき僕の本心だ。この気持ちだけは本物だって胸を張って言えるよ。それに、僕は受け入れてしまった」

「どういうこと？」

「僕は最初彼女と出会った時、教会に差し出すことも、追っ手に受け渡すことも、彼女を保護せざどこかへ逃がすこともできたんだ。でも僕はそうしなかった。三度あった彼女との接点を絶つチャンスすべて自らの手で拒絶したんだ。それは何故か？ それは僕がそうしたかったからだよ。彼女を受け入れたかったんだ、放っておけなかったんだ。実際今の生活はそれなりにうまくいってるし、僕はこの選択を後悔してない」

「今のところうまくいってるかもしれないけれど、でもハンスちゃん。あなたの言う生活はほんの僅かなきっかけで壊れてしまう脆いものよ。いつか終わりが必ずやってくるものよ？ わかっているの？」

ハンスにはワンが今口にしたこの質問が、自分自身に対する“再確認”のように思えた。自分の進む道はこれで正解なのか。いつか来る終わりの日を受け入れることができるのか。

答えは決まっている。

「もちろん、わかっているさ。その上で僕はリスクを背負っている」「そう……」

ワンは一息つくと、ハンスが腰に差している剣と、その鞘に目をやった。

「そのあなたが腰に差している“真剣”に誓えるかしら？」

「無論だよ。僕はワンが魂を込めて打ったこの剣をきつと、僕の志のために使って見せる」

ハンスの返答に満足したのか、ワンはゆっくり頷いた。

そして顔を上げた時にはいつもの細い目に薄ら笑いを浮かべた、ハンスの友人であるワンの姿へと戻っていた。

「レイフィーラちゃんが、ハンスちゃんにとってどれほどの存在かはよくわかったわ。おアツいのね、お二人さん」

「……君までそんなこと言うのか？」

しきりにからかつてくる上官や同僚のにやけ顔を思い出してハンスは顔をしかめた。それを見てワンは口許を緩めた。

「さあ、戻りましょ。レイフィーラちゃんは三日間、このワン・トウースリが全身全霊を懸けて保護するから安心しなさい」

「じゃあレイフィーラ、僕が迎えに来るまでワンさんの言うことをしっかりと聞いておくんだよ、いいね？」

「うん、もちろんだよ」

レイフィーラの力強い返事にハンスは嬉しくなっただけでレイフィーラの頭を撫でた。レイフィーラは最初は子供扱いするなと嫌がるが、いざ実際に撫でられ始めると目を細めて気持ちよさそうにする。ハンスはレイフィーラのそんなところを微笑ましく、ちよつとだけ可愛いと思っていた。

「じゃあワン。よろしく頼むよ」

再びきつちり直角九十度頭を下げたハンスに、ワンは「任しといて」と胸を叩いた。その様子がとても頼もしく思えて、ハンスは上げかけた頭をもう一度下げた。

「じゃあ僕はもう行かなきゃ……それじゃあ失礼するよ」

「気を付けてね！」「式典の日は晴れ姿見に行くからねえ」

レイフィーラとワンの二人に見送られ、ハンスは完全に宵闇に支配された、誰もいない二番街通りを全速力で駆けてゆくのだっ

た。

現在、時刻は今の時刻は十八ノ刻五十分……完全に遅刻確定だった。

修練場にはいくつか出入り口がある。基本的にどの門にも見張りが付いており、ばれずに突破することは難しい。

ハンスが今いるのは修練場に運ばれてくる荷物専用の搬入口だった。暗闇といえど鎧を身に着けた姿はやはり目立つ。見張りに見つからないように、物音を立てないように警戒しながら物陰の合間合間を移動し、宿舎へと目指した。途中何度も暗い服装で巡回している修練生に見つかりかけたが、持ち前の機転を活かして何とかやり過ぎした。寿命が縮まった気がした。

ようやく宿舎が目に入るとハンスは駆け出したくなる衝動を抑えてゆっくり裏口へと回り込んだ。窓から自室に潜入するためだ。同室はルゴドド……彼ならうまく取り計らってくれるだろう。そんなことを考えながら窓をノックしようとしたまさにその瞬間だった。

「ハンス、遅いじゃないか。何故遅刻したか言ってみろ」

洪みの利いた威厳ある声。

振り返ると厳しい面持ちでハンスを見つめる無精髭の分隊長が立っていた。

「それは……その……」

言葉を濁すことぐらいしかハンスにはできなかった。本当のことを話せばレイフィーラ、ハンス、それにワンにまで被害が及ぶ。自分の無茶な頼みを聞き入れてくれた友人のためにも、口が裂けてもさっきまでの出来事を話すことはできない。

「俺に言えないことなのか？」

「……すいません」

ハンスはミゲルに頭を下げた。ミゲルはそんなハンスをしばらく
厳しい上官の瞳で見つめていたが……やがてため息をついた。

「三回までなら失態を許してやる。これで一回目だ」

「えっ？」

反射的にそう聞き返してしまった。ミゲルはバツが悪そうに、

「三回までなら、失敗を許してやってもいいって言ってるんだ。俺
も新人だった頃上官にそう言われてミスを見逃してもらったことが
ある……だから俺もそれに倣う。つまり、今日のところは見逃して
やる」

と続けた。

「はあ……ありがとうございます」

ハンスはただ頭を下げることでしかできない。他人に迷惑ばかりか
けている自分に腹が立つ。ワンに、ミゲル。この二名の好意のおか
げでハンスは今日という一日を何とかやり過ごしてきたのだ。
「わかつたらさっさと行け。他の奴に何と言われても白を切りとお
すんだぞ」

「はいっ！」

ハンスはミゲルに感謝しつつ、宿舎の玄関へと全力で走り出した。
走る必要なんてなかったのだが何だかそうしたい気分だった。そう
せざるを得なかった。

無力で助けられてばかりの自分が腹立たしかった。空を見上げる
とラニアの街よりもやや星の数が少ない夜空が見えた。その夜空を
仰ぎながらハンスは腰に差したワンの打った真剣を抜き、星空に向
けて掲げた。そして、この夜空とワンの剣（なぐさ）に誓う。

いつか必ず、自分一人の手で大切な人を守るようになってみせ
ると。

#06 豚が彩る血の宴

それから三日間は、何の問題もなく過ぎた。

ハンスたちグラーナ神殿騎士団が昼間は門の警護や街中の巡回を行い、夜にはグラーナ神殿の神官たちが力を合わせて結界をつくることよって街に一匹の侵入者も許さなかった。ハンスは初日は休憩中など合間を見つけてはワン工房を訪ねていたが、「心配しすぎっ！」とレイフィーラに怒られてしまったため二日目・三日目には若干しょんぼりしながらも任務に真面目に取り組んだ。

そして、降臨祭最終日 聖光神体系信者にとって一年最大のイベントである式典が行われる日がやってきた。

まだ空が黒からようやく群青に変わるかというほどの早朝。式典中の警備にあたる三神殿騎士団は大聖堂前に集合し、他の信徒たちより一步先に簡略化された式典を行っていた。

「聖光神の誇りである三母神、カイラス天空神・デユプト海洋神・グラーナ大地神の申し子である貴君ら神殿騎士は、残念ながら式典には参加できないがしかし……」

規則正しく聖堂から見て左から空色・紺・赤銅の順に並んだ三神殿騎士団の前に立って喋っているのはレイズリア皇国の実質的な最高責任者である、ルドルフ・デिताニア卿だ。尖った耳に鼻。一見二十代にも見える若々しさ。人間では到底得ることのできない美貌。朝の冷たく微弱な風になびく金色の髪。神に愛され、精霊を友とするまさに神の申し子。

彼はエルフ、それも純粋な血統であるハイエルフだった。

「遠すぎて、何言ってるかよく聞こえないぞ」

「はあ、いつ見てもルドルフ様はかっこいいわあ……」

周囲からは風に乗って私語が耳に入ってくる。ハンスたち末端の分隊は列の最後尾付近に位置しているため、ほとんど教皇庁の重役

を拝むことができない。その上退屈な形だけの話だ。よほど敬遠な信者でなければついつい私語を発してしまうだろう。

ハンスは主に隣のルゴデドや後ろのマリヤから発せられる雑音に気をとられないようにしながら、まっすぐ前を向いてルドルフの話に耳を傾けていた。そして彼を取り巻くようにして立っている他の重役にも目を向けた。

ハンスが普段もつとも見慣れているグラーナ神殿の最高司教は、式典用の華美な法衣にその小さな身を包んでいる。丸々とした身体デュプト神殿最高司教、長身のカイラス神殿最高司教と三人で立ち並ぶ姿は、よく均衡が取れていた。

横を見れば騎士団上がりのカリアン卿と、神官上がりのキューミア卿が並んで騎士たちを眺めていた。

屈強な体格をしたカリアン卿は現在では内政担当の職についているが、今でも十分騎士としてやっていけそうだ。白い法衣は筋肉で盛り上がっており、あまり似合っていないかった。

キューミア卿はカリアン卿とは逆に穏和な印象を受ける女性だった。ハンスより色の明るい蜂蜜色のさらさらな髪を腰まで垂らして、見るものに安心感を与える微笑を讃えている。しかし気のせいだろうか？ 目許が笑っていないような気がする。騎士たちに対して浮かべている笑みはどこか白々しいもので、向ける視線には鋭い眼光が含まれているように感じられた。ハンスの思い過ごしか、あるいは女性ながら外交の最高責任者としての職に就いているのは伊達ではないということか。

ぼんやりと普段お目にかかることのない重役たちを眺めていたら、いつの間にかやらルドルフの話が終わっていた。金髪の美丈夫と入れ替わりに、聖堂騎士団のものとなる白い鎧を着た人物が騎士たちの前へ立った。

ハンスは息を飲んだ。

白い鎧とは対照的な褐色の肌をしたその男は騎士たちの目の前に

立った、ただそれだけの動作で場の空気を張りつめさせ全員を黙らせた。騎士をしているものなら 剣を握る者なら誰もが一目置くこの国の騎士の象徴。そしてハンスの目標であり、憧れ。まさしく雲の上の存在。

聖堂騎士団団長ギデオ・ジェバ・ジャグライナ。

砂漠の民の血を引くその男は、鋭い……研ぎ澄まされた刃のごとき視線を一切遠慮なく竦み上がる騎士たちに差し込んだ。

「問おう。騎士とは何だ？」

ギデオの口からポツリ、聞き取れるかどうかというくらい小さな問いが発せられた。だが誰もが彼の言葉を聞き洩らさなかった。しかし誰もが彼の問いに答えることができなかった。

「騎士とは刃なり」

彼はそう続けた。ハンスはギデオの持つ圧倒的なオーラに畏怖し、肌が粟立った。格の違いを痛切し、それが憧憬へと昇華されてゆく。「諸君は神を邪まじひなものどもから守る刃なのだ。神の名の下で結びついた巨大な一振りの剣なのだ。諸君にはそれを念頭に置いて警護に当たってもらいたい。よいな？」

『応っ！！』

あれだけ弛緩していた空気がギデオの存在によって引き締められ、騎士たちはまさしくひとつになった。三神殿騎士団の全員が背筋を張って前を向き、褐色の騎士の次の言動を注視している。ハンスはまさしく全員が刃になったかのような錯覚を抱いた。

「……私からは以上だ」

ギデオはもう何も言わずに後ろに下がっていった。だがそれで十分だった。余計な語を挟まずとも彼の意志は騎士団全体に伝わっていた。ハンスはギデオの拳動に改めて感銘を受けた。

圧倒的な強さのみでないその統率力。カリスマ性。何よりハンスはギデオと自分との絶対的な距離を感じた。

騎士とは刃なり。

ハンスは胸中にて、再び呟いた。

前では教皇が何かを話していたのだが、今のハンスにはまったく耳に入らなかつた。

二番街通りの果て。アウルダム南端の門にて。

ハンスは、次々大聖堂へと向かう人々をぼんやり眺めていた。

「何も、三騎士団全部で警備する必要なかつたんじゃないの？ 明らかに警備人数が多すぎだろ」

「しゃんとしろリヤグス。他の騎士団もいるんだぞ」

気だるそうにしている部下をミゲルが叱責した。だがしかし、彼のみならず他の分隊の面々も同じように感じているようだ。

無理もない。グラーナ神殿騎士団、カイルス神殿騎士団、デュプト神殿騎士団の三騎士団全員でたった四つの門を守っているのだ。門の外に何人見張りを置いてもお釣りが来るくらいの人数である。聖堂騎士団が大聖堂周辺の警備を一手に引き受けているため式典に行くことも許されない。

ハンスはもうすぐ回ってくる警備の番を今か今かと待ちながら、意味なく二番街通りをうろろ歩いていた。

「警備交代の時間だ！ 次に担当する分隊は門の外に来い」

ハンスはその言葉を聞くや否や門に駆け出した。ミゲルにたしなめられたが今のハンスはとにかく何かがあった。騎士としてできる何かを。

同僚が壁にもたれて居眠りしてる間にも、ハンスはずっと周囲を油断なく見回していた。射抜くような視線で、草原の果てにある森の隙間さえ見逃さぬように警戒している。

市中からは人々の声が聞こえてくる。ただのざわめきに聞こえるが、耳を澄ませばそれがギデオに対する歓声だと気づく。

レイズリア皇國中枢部の国民からの評価は決して高い訳ではない。国民に課せられる税金は重く、貴族などの一部階級を除いての生活水準は近隣諸国と比べると押し並べて低い。

そんな状況下でも国民による暴動が起きないのは、神に対する信仰心が彼らの行動を抑制しているのと、もう一つはギデオを始めとする騎士の国民支持が高いからである。常に国民のことを考え、人間に危害を加える邪悪な亜人を征伐する……騎士のそんな姿は国民の求める“英雄”像にピッタリと合っていた。

ハンスはその歓声を聞いて口許を綻ばせた。ギデオの支持は聖堂騎士団への支持、ひいては神殿騎士団への支持だ。民がギデオを通じて騎士を支持してくれるなら、より一層職務に身が入る。

「頑張つてかないと」

そう言いつつ、再び草原の方に視線を向けて　　ハンスは固まった。

草原の果ての森林から何やら肌色の物体がうじゃうじゃ湧き出してきたのだ。目測で三十体……いや、五十はいるか。それは人型で手に棍棒を持ち身にはみすばらしいボロを纏っているのみで、人間より巨大だった。のっしのっしと不敵な笑みを携えゆったりアウルダムに近づいてきている。

ハンスの額から汗がフッとこめかみまで伝って、足許の雑草へと吸い込まれた。突発的なパニックに陥りそうになった心を、心臓ごと押さえつけるような荒い深呼吸で自己を取り戻す。そして門の向こう側にまで聞こえるような声で、

「前方に豚人　オーク　の群れを発見！　至急援護願います！」

叫ぶ。

必死さのあまり少し掠れてしまった若い騎士の声は、南門の担当

をしていたグラナーナ・デュプト・カイラス騎士団の全部隊の鼓膜を振動させた。“亜人”の襲撃に騎士たちはさつきまでの緩み切った表情を引き締め、南門を開け放つと豚たちへ一斉に出撃を始める。一瞬の内に、門を死守する部隊と豚人討伐を行う部隊に分かれた騎士たちの手際の良さにハンスは素直な感嘆を抱いた。

亜人狩りは騎士最大の職務で名誉である。ハンスはこれから行われる闘いを想像して震えた。それが怯えているからか武者震いなのかはわからない。しかし身体は昂った感情によって振動せざるを得なかったのだ。

「俺たちも出撃するぞ！！ みんな俺に続け！」

ミゲルの声が聞こえた。ハンスは先行する騎士たちに続き走り出す。鎧の重さも気にならないくらい、心臓が飛び跳ね暴れ回っていた。

ハンスが着いた時にはすでにオークの軍団と先行の騎士たちの戦いが始まっていた。豚人はどんなに小柄なものでも二メートルはある。そして恰幅のある体は少々の刃では怯まない。数は圧倒的に騎士たちの方が有利だが、この耐久性と不意の一撃の恐ろしさより、オーク一体に対して騎士数人で攻めざるを得ない。結果的に両軍の戦力は均衡を保っていると言えた。

「く、この……」

ルゴデドはさっそく襲いかかってきたオークの棍棒を大剣の腹で受け止めた。大剣を軽々振り回す程の膂力を誇るドワーフだが、それでもオークの怪力には及ばない。ルゴデドはあっさり跳ね飛ばされ、草の上を無様に転がっていった。

周囲を見れば同僚たちも何人かで組になって醜い豚人を一体ずつ相手していた。ハンスも覚悟を決めてルゴデドに襲いかかったオークに果敢に斬りかかった。突進しながらの薙ぎ払いだ。練習通り、落ち着いて、正確に……。

ハンスの斬撃はオークの腹を的確に捉えた。ぶにゆり、厭な感触がワンが打った剣を通して伝わる。ぞくりとした。これが命を斬る感触なのか……ハンスは戦慄する。オークは醜い面を苦味で一杯にしながらも棍棒でハンスに反撃を試みる。しかし負った傷が深かったのかその一撃は呆れるほど遅い。ハンスは難なくそれを躲すと、防御姿勢を取ろうとしたオークの傷口に剣を一気に突き差し、引き抜いた。内臓からポタポタ、命の源であるようなドロドロとした血が滴る。オークは両手で出血を止めようとしたがかなわず、腹を抱えるような体勢で崩れ落ちた。もうそれ以降、オークが動くことはなかった。

想像していたよりもずつと簡単に、オークは死んでしまった。命とはこんなにあっさり絶たれるものなのか。ハンスは血に染まった刃を眺めながらぼんやりそう考えた。剣を通して伝わってきたあの感触は気味が悪く、恐ろしかったが……そこまで悪いものではなかった。ハンスは少しだけ、命を奪う行為に対して“快感”を持つてしまった自分に対し驚き自己嫌悪に陥りながらも思考を止めることができなかった。

ハンスは昂った状態のまま、ミゲルらが取りこぼした傷だらけのオークの懐に飛び込んで、喉笛を掻っ切つてやった。今度は派手に血を噴き出して、オークは倒れた。更にその勢いを止めぬまま別の騎士と交戦していたオークに思い切り突きを浴びせてやった。オークの分厚い脂肪を貫き、内臓に達した感覚があった。オークがもがいている隙に別の騎士がその首を跳ね飛ばした。オークの苦悶に満ちた顔はゴロリと転がって、ハンスを睨む形で静止する。

「ひっ」

豆粒みたいな小さな丸い瞳は、恐怖と憎悪によって彩られていた。それがすべて自分に向けられている気がして、ハンスはひやり、身体中が凍りつくような感覚に襲われた。怖い。突発的にそう感じる。と恐怖はハンスの全身を駆け巡り、さっきまでの勇猛な自分を食い散らかしていった。

怯えるハンスに騎士たちを掻い潜って別のオークが襲い掛かる。仕方なくハンスは迎撃する。オークの動きはあまりに単純で捻りがなく、恐れるには至らなかった。

しかしハンスは怖くなつて反撃ができない。どうしても剣が振るえず、次第に追い詰められてゆく。心が揺れている。恐怖と快感、相反しているはずの二つの感情がどちらも鎖となつてハンスの行動の自由を奪う。そしてついに、ハンスはオークの死体に足を取られてよろけてしまった。生まれる絶対的な隙……オークのフルスイングが、やけに遅く感じられた。

ここで死ぬのか。

ハンスは心の中でそう呟いた。慣れない経験に浮き足立ってしまったのは自分の悪い癖だが、まさか最期をその悪癖のせいで迎えることになるとは思わなかった。ただひたすら無念だ。強くなつて大事なものを守ることも死んでしまつては叶わない。ハンスは戦場の真つ只中で、すべてを諦め瞑目した。

「油断するな！ 怯えていては騎士は務まらんぞ！」

恐る恐る目を開くと、ミゲルがオークに体当たりして棍棒の軌道を逸らしていた。そしてすかさずルゴデドが攻撃。オークは血を噴いて倒れる。ハンスはゆっくり立ち上がった。途端にミゲルに殴られた。あまりの痛み眩暈がする。

ミゲルは殴られた箇所をさするハンスに今までにないくらい強い調子でこう告げた。

「死んでしまつたらすべて終わりだろうが！ 冷静であれとは言わんが、正気だけはいつも保っている。お前が死んだら悲しむ人がいるだろう」

「悲しむ、人……」

レイフィーラ。

浮かんだのは人ではなかった。でもハンスにとって大事な存在だ。

彼女は自分が死んだら悲しむだろうか。そうだったら嬉しいと思う。でも彼女を悲しませたくはない。彼女はいつも笑顔でいてほしい。

ハンスは深呼吸をして、気持ちを落ち着かせた。血生臭い空気がハンスの五感を研ぎ澄まさせる。もう大丈夫だ。確信はないがはっきりとそう思えた。

「申し訳ありませんでした。もう大丈夫です」

ミゲルはハンスの言葉にうんと頷くと、いつものような笑みを浮かべ無精髭を撫でた。そして周囲を見渡し、

「……どうやらあれがリーダーみたいだな」

と、顔を引き締めて草原の彼方を指さした。

見れば先程までのオークより明らかに一回り以上巨大なオークがこちらに向かつて来ていた。

巨大オークは他のオークに比べ、肌が黒く古傷がとても多い。腹、腕、足……いずれにも隠しようのない傷痕が目立っている。腕には棍棒の代わりにハンスの身長くらいの戦斧を携えている。

一人の騎士が巨大オークを食い止めようと奴の横腹に剣を突き立てた。だが、驚いたことに巨大オークの褐色の肌は騎士の鍛えられた鋼剣をも弾き、そして啞然とする騎士を太い二の腕で騎士を吹き飛ばした。どうやらあの古傷はただの飾りではないらしい。巨大オークはずんずん進む。敵味方お構いなしに、近づく者は皆弾き飛ばし門に向かっていく。

不味い。

あれに突破されたら、街中が混乱に包まれ騎士への信頼が失墜してしまう。レイズリア皇国民なら誰もが降臨祭という行事の重要性を知っている。もしこの行事中、市民や来賓に怪我でもさせてしまったならば いや、神聖なる行事中を穢らわしい豚の乱入で無駄にするだけでもとてつもない問題だ。外政・内政に大きく響く。ならば騎士としてなすべきことは一つ。

「あのデカいのを迎え撃つぞ！」

「はい！」

ハンスはミゲルとともに巨大オークの駆逐へと赴いた。巨大オークの周囲にはまるで近衛兵であるかのように数体のオークが取り囲んでいる。彼らは近づいてきたハンスに反応して棍棒を振り上げた。構わずハンスは突っ込んでゆく。オークたちはあまり統制がとれていないのか、ハンス一人に対して三体同時に襲いかかってきた。動きが鈍いので躲すのは容易い。ハンスはそれらを避けると、一気に巨大オークに肉薄した。

「ググググ……！」

巨大なオークが唸る。間近で聞くと鼓膜が破れそうなくらいの音量だ。地面まで振動しているかのような錯覚に襲われ、ハンスから一瞬平衡感覚が奪われる。

すかさず襲い掛かる巨大オークの拳。ハンスの身体が舞い上がり、一回転して柔らかな草の上に叩きつけられる。草がクッションになったのが幸いしたが、仰向けの今の体勢は隙だらけだ。

他の騎士たちを振り切つて、立ち上がるハンスに次々オークが押し寄せる。一人でも多く騎士を狩るつもりだろうか？　だが、やられるつもりは毛頭ない。ハンスは素早く前転をして棍棒の波を掻い潜った。立ち上がれば前方に巨大オークがミゲルやカイルス・デユプト神殿騎士と闘っているのが見える。後方から迫ってくるオークは無視して、ハンスは巨大オークの許へと駆ける。

巨大オークは騎士が数人掛かりでもまったく怯む様子はない。それどころか驚異の耐久力を武器にどんどん前進していた。生半可な斬撃はすべて弾き返されるか、掠り傷程度で止まってしまうのだ。騎士たちは次第に焦りの表情を浮かべる。剣が効かない。これは白兵戦において致命的な問題だった。

「どうする！？　もうすぐ門に到達されるぞ！」

空色の鎧を着た男が叫んだ。

門まで約二百メートル。

もはや一刻の猶予も許されない。ハンスは果敢に突撃した。巨大オークの足許に狙いを定め剣を振るう。ほんの僅かだが、巨大オ

クの右足の膝頭に傷がついた。巨大オークは褐色の豚面を醜く歪めた。どうやら少しは効いているらしい。ハンスは手を休めることなく次々傷を抉るかのようにオークに斬撃を加えてゆく。一太刀、二太刀……巨大オークの動きは緩まり、表情にも余裕がなくなってきた。

巨大オークはでたらめに斧を振るっている。他の騎士は離れるが、ハンスは決して離れない。足許に斧の軌道が及ぶことはないからだ。そして膝を中心に剣で斬る。ワンの剣の切れ味は鋭く、たとえつつもなく堅い巨大オークの肌であろうとも刃が通る。ハンスは無心で斬り続け、不意に、

衝撃を感じた。

「あがつ!?!」

オークの脚で蹴飛ばされていたのだ。右足ばかりに気を取られ、斬りつけていない左足に注意を払わなかった。完全なハンスのミスだ。立ち上がるうとするが遅い。みしみし、右腕に嫌な感触が伝わり、次いで粉碎音が脳内を駆け巡り、最後に遅れて激痛が走ってきた。

巨大オークの足に右腕を踏まれてしまったのだ。「がああ……」痛みのがあまりちゃんとした声すら出せない。ハンスは次の攻撃を避けるべく痛みをこらえて立ち上がり、いったん巨大オークから距離を取ろうとした。だが避け際に、背中に斧の重い一撃が加えられてしまった。鎧はあっさり砕かれ背中肉にまで食い込む。

幸い背骨にまでは至らなかつたようだが、それでもかなり深手を負った。巨大オークはハンスにもう一撃浴びせようと斧をかざし、振り下ろした。もはや後退できる余裕はない。ハンスは鈍い身体を引きずって巨大オークの懐に飛び込んだ。そして先程膝に付けた傷口に向かい、鍵を差し込むのごとく、根元まで剣を差し込んだ。巨大オークから声にならない悲鳴が上がる。

オオオオ……! 剣を伝う振動と温もりが巨大オークの呻きを明確に感じさせた。

ハンスは程なく吹き飛ばされた。巨大オークの拳を食らったからだ。まるで腹に大岩がめり込んだかのような衝撃。アバラが折れる感覚とともに胃の中が逆流する。目前に緑色の地面が近づく。今度地に伏せてしまったら恐らくもう二度と立ち上がれないだろう……ハンスの脳裏をそんなことがよぎった。

自分は果たして役に立っただろうか？ 騎士として務めを果たせただろうか？ そうであってほしいと願いつつハンスは眼下に迫る闇に一時身体を委ねることにした。

「……お前は、新人か？」

暖かい感覚に包まれ、ハンスは当惑した。目を開くと、何と目前にギデオの浅黒い顔があった。彫像のごとき彫りが深く美しい顔立ち。どうやらギデオは巨大オークに吹き飛ばされたハンスを抱きとめたらしい。

ハンスは緊張のあまり体中を駆け巡る激痛を忘れ、かくんと首を振った。

「新人にはよくやった。後はここで見ていろ」

その瞬間、ギデオのまったく無表情だった顔に微弱な笑みが浮かんだのをハンスははつきりと目撃した。

ギデオは戦場から離れたところにハンスを寝かせると、一陣の風のように優雅に、一瞬で戦場まで駆けていった。その様子をハンスはただ大口を開けて見つめていた。

座って見ているハンスの横を、白い鎧を着た集団が次々駆けていった。どうやら聖堂騎士団が駆けつけてくれたようだ。ということはずまり……降臨祭は無事に終わったということか。

「……よかった」

ハンスは安堵して一息ついた。これだけの軍勢があればすぐにオークの軍団など敗走するだろう。傷が痛むがじきに神官が来て癒してくれる。そしてハンスは戦場へと目を向けた。

ギデオの動きはまさしく驚愕の一言だった。

やや刃の長い剣で斬り、払い、打ち、突き、返す。その挙動一つ一つにオークたちの血の花が咲く。彼の前ではオークなど“捕食”される弱き獲物に過ぎなかった。

戦場で暴れ回る黒い疾風に、巨大オークが右足を引きずりながら戦斧を振って襲いかかった。だがしかし、ギデオはそれを予知していたかのように舞い上がり、オークの斧の上に飛び乗った。

そして困惑する巨大オークに向かい跳躍し　　剣を一闪　　華麗に着地した。

巨大オークの首はゆっくりずれ動き……次の瞬間、ゴロリと転がって地面に墜ちた。ブシューウウウと血が噴火し、それを浴びてギデオの白い鎧は赤く、紅く、朱く……真つ赤に染まってゆく。巨大オークの胴体はしばらく首を探すかのようにうろろ動いていたが、やがて仰向けにバタンと倒れた。

「すごい……！」
ハンスはただ感嘆の声をあげるしかない自分をとても齒痒く思った。

オークたちはリーダーが殺されてしまったことですから戦意を失くし、森に向かって逃走を始めた。これで戦いは終わった。ハンスたちは勝利したのだ！

ところが、

「逃げ惑うオークどもを全員狩れ。一体たりとも残すんじゃないぞ……」

ギデオが下した命にハンスは我が耳を疑った。勝負はもう着いたのに、何故……？

騎士たちは背中を向けて逃げ出すオークたちを追いかけ、斬りつけてゆく。豚たちは苦悶の表情を浮かべ、次々騎士たちの餌食にな

る。腹を突き刺されたり、足を斬られて髀られたり、首を跳ね飛ばされたり……。その騎士たちの姿は、ハンスが憧れていたものとはまったく違う、おぞましいものだった。

何故こんなことを……そう考えている内にみるみるオークたちは数を減らしてゆく。その過程で傷を負う騎士もいたがそんなことは気にしていないかのように騎士はただ、切り刻む。豚を調理し続ける。

「いいぞ、もっとやれ！」

「騎士たちはやはり最高だ！」

「神に豚の血を捧げるのだ！」

「穢らわしいオークどもを滅せよ！ ぶった斬れ！」

「殺せ！ 殺せ！ 殺せ……！」

後方から黒い歓声が上がっている。後方を向けばそこには観衆がいた。貧しい市民も、富める貴族も、神官も観光客も教皇庁関係者でさえも……皆が観衆だった。この残酷な宴に歓喜する、観衆だった。

ハンスは背筋に氷柱を落とされたような寒気と、チクリとした感覚に襲われた。おかしい。目の前に広がる光景に身体が打ち震える。怖い。

単純にそう感じた。生物的本能が目の中の事象に拒否反応を示す。嘔吐物が喉まで込み上がってくる。息が苦しい。何だこれは。これがハンスが守ろうとしていた民衆の姿なのか。これがハンスの憧れていた騎士の姿なのか。自分は何を見てきたんだ。今まで自分が大事にしてきたものは……こんなものだったのか！？

「やめろ……」

ハンスの声はどこにも響かない。熱狂する観衆の声は騎士たちをも興奮させ、逃げ惑うオークたちは次々断末魔の叫びを上げる。

もうやめろ！ オークは抵抗していないじゃないか！ もう決着は着いたし何でここまで徹底する必要があるんだ！？ 何故み

んな平気な顔してこんな惨劇を見ていられるんだ！？ 僕が信じたものは何だったんだ！？

ハンスの内側から、やりきれない思いが吼えている。だがそれが言葉になることはない。

もはや、今のハンスには事の顛末を魂の抜けた顔で見ることしかできなかった。観衆は血に濡れる騎士を見て終わることのない歓声を上げ続けている。まるでハンス以外の全員が熱狂の宴に踊り狂っているかのようにだった。殺す騎士、殺される豚、見る観衆……三位一体になって築かれる最低の演劇。

いや、ハンスだけではない。

「レイ、フィーラ……………」

観衆の中から一人、こちらを覗く姿があった。土色のフードを被り、熱狂する観衆に押しやられながらも黒真珠のような瞳はただハンスをまっすぐ見つめている。

彼女の視線がハンスを刺す。皮膚を突き破り、内臓を掻い潜って心臓に直接突き刺さる。レイフィーラは哀しい顔をしていた。目の前の光景を見て、悲しそうにただハンスに訴えかける。

あなたも、同じなの？

「違うっ！！」

ハンスはあらん声で叫んだ。「違うんだレイフィーラっ！ 聞いてくれ！」ただ叫ぶ。観衆がハンスの叫びを掻き消すがめげずにハンスは叫ぶ。そのうち喉が涸れてきた。気にせず叫ぶ。傷口が開き、身体からドクドク血が流れる。それでも叫ぶ。意識が朦朧として、段々身体に力が入らなくなってきた。ハンスの声は届かない。レイフィーラは哀しい、しかし悟りきった顔でもがくハンスを見つめて

いた。

「違うんだ……僕は、僕は」

最後まで言葉が続かなかった。脳内がハンスの意識を強制的に遮断し、視界がブラックアウトする。

ハンスの苦悶する魂は、必死にレイフィーラに訴えかけるが届かない。

ここで見ていろ。

目の前の惨状も、レイフィーラの困惑も。

すべてを満身創痍のハンスには見ていることしかできなかった。

見ていることしかできなかったのだ……。

6・5 ある侍女と、鳥人と、幽玄の少女

仄暗い部屋の中。窓はカーテンによって閉ざされて、陰鬱な空気が漂っている。

決して晴れることのない空を見つめ、床につく程までに髪の毛の長い少女が一人、天蓋付きベッドの上に腰かけている。服装は薄い紫陽花色のネグリジェを着ているのみで他には何も身に纏っていない。前髪のせい目許は完全に見えないが、その口許は吊り上がり笑みを形作っているようだった。

「ようやく……ようやく見つけ出しましたわ……」
クスクスと漏れる笑い声は優雅であったが、同時に酷薄でもあった。

コンコン、と遠慮がちなノックの後に扉が開き、緊張した面持ちの侍女が入ってきた。

侍女は人ではなかった。

侍女は緑色の鱗に覆われた爬虫類……トカゲのような外観をしていた。髪の毛どころか身体中に毛というものが見当たらず、見る者にどこか冷たい印象を与える。だがしかし、今彼女の縦長に裂けた瞳孔は目の前の少女に対する畏怖により極限まで開かれていた。

侍女は長髪の少女の前で気をつけの姿勢をとった。そしてそのまま少女の指示を震えながら待つ。

「準備は整っているのですか？」

「ええ、扉の前で待機させております。が」

無邪気に訊ねてきた少女に、侍女が戸惑いを含んだ返事を返す。

「何か？」

「いえ、その。あれは鳥乙女 ハーピー の中でもかなりの、その……何と申しますか、落ちこぼれでして……。今回の任務は正直あ

れには荷が重すぎるかと」

「わたくしに意見するの、ゲナ？ それはつまり……エビルのようになりたいということかしら？」

「 そんな！ め、滅相もございません！」

トカゲ侍女……ゲナは緑色の肌を真つ青にしながら、首を振り数歩後ずさった。瞳が不規則に揺れ、それが恐怖を体現している。エビルとは以前この少女の侍女だった蜥蜴人 リズマン である。今はもういない。目前にいる少女の逆鱗に触れ食い散らかされてしまったからだ。

エビルは優しい先輩だった。ゲナに一から仕事を教えてくれたし、ミスをカバーしてくれたし、何よりこの屋敷に務めることになってから不安定になった心を支えてくれた。

エビルがいなければゲナはとくに少女の糧になっていただろう。ゲナが口を閉ざし、わなわな震え出したのを見て少女は「冗談よ」と笑いかけた。そして立ち上がるとゆっくりゲナに近づき頬に手を触れて、

「わたくしだって、むやみやたらにあんなはしたないことをする訳じゃないですわ。それに貴女はよくやってくれているし。そう……エビルと違ってね」

そう、ゲナの耳許で囁いた。一瞬自分に殺意が向けられた気がして、ゲナの身体に悪寒が走る。全てを捨て去って逃げ出したい衝動に駆られる。

しくじったら、殺される。

今まであらゆる立場の亜人を、この少女は殺めてきた。ある者は逆鱗に触れ、ある者は戯れの果てに、ある者は食され、運の悪い者は……ただ何となく殺された。

だが、少女のそんな狼藉を知る者は少ない。無知な民は、貞淑で病気がちな公爵家の次女として少女を支持している。ゲナもこの家に来るまではそうだった。

「大丈夫。心配しなくても、あの子はきつと上手くやってくれるわ。この前の刺客はダメな子だったけれど、あの子はわたくしの親友でしたもの」

ゲナの黄色い瞳をまっすぐに見つめ、少女は微笑んだ。前髪で目許は見えないが、真紅の唇を押しつけるようにしてニユツと牙が伸びた。

「……親友、ですか」

「ええ。わたくしたちは幼い頃、確かに身分を超えた友達でしたわ。だから今回の任務もきつとこなしてくれるはず」

「……」

ゲナは返す言葉が思いつかず、ただ俯く。

少女はそんなゲナの首筋に、軽く口付けた。ほんの少しだけ、牙が立てられる。

ただそれだけで、ゲナの身体中に電撃が走った。それは恐怖によるものなのか、快楽によるものなのか。

「……今晚、また来なさい」

少女はゲナにそう囁いて、少女はふたたびベッドに腰掛けた。

ゲナは恍惚とした表情を浮かべ、カクン、と糸の切れた操り人形のように頷いた。

「では、呼んでまいります」

心臓が暴れるのを必死で抑えながら、ゲナはようやく退室することができた。

そして扉の外ですっと待っていた、一人のまだ若いハーピー入室を促す。ハーピーはそれに従い扉を遠慮がちに開け、中に入っていた。

ようやく一人きりになることができた。自分の部屋に戻ることにできず、ゲナはへなへなと廊下に座り込んだ。公爵の趣味である深紅のカーペットは横になれば布団代わりになってしまいそうなくらい心地がいい。

ゲナはあの少女を、愛している。

いつ殺されるかと恐れ、常に恐怖を抱いているのも事実だが、同時にあの少女の美しさに惹かれているのだ。一人では眠れない、子供のようなところも好きだ。愛しい。だが怖い。二つの相反する感情がゲナの胸の内で共生しているのだ。

「クレシヤ様……」

ゲナは愛しくてたまらない主の名を呼びながら、焦がれながら、瞑目した。

「そんなに畏まらなくても大丈夫よ、エル」

微笑を浮かべた少女の前で、鳥乙女　ハーピー　のエルディルは直立していた。

くすんだ灰の混じった白い翼はしょんぼりと折り畳まれ、白と灰の羽根が何枚か床に抜け落ちている。

エルの上身はほぼ普通の女性である。ありふれた焦げ茶の髪に瞳。少し意地が悪そうな吊り目。そばかすのある頬。全体的に引き締まった……というよりは少し痩せたスレンダーな身体。その身体

にそぐわない大きな双丘。どれをとっても普通の女性の域を出ない。

「とりあえずかけなさい。ほら、昔みたいに」

「そ、そんな……恐れ多いです」

「……………二度、同じこと言わせないで？」

少女を取り囲む空気が急に刃のように鋭くなった。放たれる途方のない殺気。

エルは仕方なく、桃色のベッドの上に腰かけた。すぐ隣には恐ろしい少女がいる。

「それでいいのよ、ふふふ」

口許を歪め笑う少女にエルも乾いた愛想笑いを返す。緊張で羽毛の抜け毛が著しくなった気がする……エルは足許に散らばる羽根を見てため息を漏らした。

彼女の腰辺りから下半身全域は、白を基調として若干黒や灰が混じった羽毛に包まれている。羽毛は腕を伝い背中にある肩甲骨まで続き、ハーピーの象徴である鳥のごとき翼と繋がっている。彼女の足首は毛がまつたく生えていない鳥足になっていて、三本の指からは鋭い爪が抜き出ている。

「何故、実力のない私が刺客に選ばれたのでしょうか？」

目を伏せ、申し訳なさそうにしながら……エルはそう訊ねた。クレシヤは尖った顎に人差し指を当て少し考え込んだが、

「だって、わたくしたちは幼馴染みじゃない？」

何がおかしいのか、愉快そうにそう答えた。

「クレシヤ様……レイフィーラ様の暗殺は私には役不足です。あの御方はクレシヤ様も知っての通り、とてつもない実力をお持ちですから……」

怯えながらも、エルはそう言い切った。

前の刺客はレイフィーラを寸でのところで取り逃がしてしまったらしい。何でもクレシヤに心酔していた下級竜 レッサードラゴン

の女たちらしいが、今はもうこの目の前の少女の血肉に成り果てたようだ。

クレシヤはゆっくりエルの手に関自分の手を重ねると、甘美な声で諭すように口を開いた。

「真つ向から勝負を挑んで、姉様に敵うものなんてハーピーの中にはいないわ。でも、幼馴染みの貴女なら」

「隙について殺すことができる、と」
クレシヤは満足げに頷いた。心なしかその様子は、エルを見下しているように思えた。

エルは心中にてヘドを吐く。本当にいい性格をしたお嬢様だ。ハーピーの自分が、ドラゴンニユートの彼女の横にいるだけでどんなに恐ろしいか知っているくせに……。昔の無邪気な自分が恨めしい。エルはベッドの裾を握りしめた。

「ねえエル、貴女今、実績が出なくて困ってるんでしょう？」

「………」
「もしこの任務を成功したのなら、貴女の立場を見直すように掛け合っただげるわよ。どうかしら？」

肩に真つ白な手が置かれ、悪魔のような囁きが、耳許に。エルは何も言わずブルブル、震えるしかない。

確かに自分の家系はハーピーの中でも落ちこぼれで、同族からかなりの迫害を受けている。むろんエル自身の能力も凡庸の域を出ない。他のハーピーを見返したいという気持ちはある。常にその気持ちに溢れている。

しかし、レイフィーラはあまりに恐ろしい。クレシヤもそうだがドラゴンニユートがひとたび竜に姿を変えれば、自分などただの活きのいい餌と変わらない。炎の一吹きで鳥人の丸焼きの出来上がりだ。

「大丈夫。あなたの戦闘力になんて期待してないわ。はいこれ」
「……？」

エルは、クレシヤがどこから取り出した小瓶を受け取った。中

は透明で無味無臭の液体で満たされている。エルはしばし怪訝な眼差しでその小瓶を睨んでいたが、

「わたくしが独自に製造させた毒薬よ。理論上、お父様でも一飲みで死んでしまうほどの効力があるわ」

その言葉を聞いて慌ててエルは小瓶を手放し距離をとった。その様子を見てクレシヤは心底おかしそうに笑う。

「馬鹿ねえ、瓶に入ってるんだから大丈夫よ。まあこれを姉様の食事に混ぜたらイチコロよ、きつと」

「は、はあ」

エルは無邪気を装って、これ見よがしに自分を嘲笑うクレシヤに腹を立てながらも、何とか心ない返事をした。

クレシヤはしばらく腹を抱えながらベッドの上を転がっていたが、突然起き上がると真剣な表情になって、

「……………やってくれるわね？」

そう短い問いを発した。一応疑問形ではあるが、最初から選択肢なんてひとつしか用意されていない。

「慎んで、お受けいたします」

エルはベッドから立ち上がると、クレシヤの前に膝まづいた。クレシヤは先程とは打って変わって優しい微笑みを浮かべる。

「きつとあなたなら引き受けてくれると信じていたわ」

「私は、クレシヤ様の忠実なる僕です」

「まあ！ さつきから思っていたけれど、“クレシヤ様”なんて堅苦しいわ。昔のように“クー”って呼んで？」

「……………く、クー」

「うふふ」

本当に嬉しいのかわからないが、クレシヤは嬉しそうに身をよじらせた。エルの胸中は不快でもういっぱいだ。早く部屋から退出したい、この少女から少しでも離れたい……………そのことしかもう考え

られない。

「じゃあ早速渡しておくわ、こぼさないようにね。もしこぼしたら……周辺の生態系が変わっちゃうかもしれないから」

クレシヤはエルの手の小瓶を握らせながらクツクツ笑った。そのあまりに素晴らしい性格にエルは感涙しそうになる。

「では、行つて参ります」

「あら、もう行っちゃうの？ お茶でも飲みながら昔話でもどう？」

「いえ、これからの準備などもございますので……。帰還した際には必ず」

「そう、残念ね」

心から残念そうに、クレシヤは肩を落とした。

「では、レイフィーラ様はいずこに？」

「ああ、姉様は」

そこでクレシヤは、露骨に不快な顔を浮かべた。牙がニユツと、今にもエルに噛みつかんばかりに伸びる。黒い翼が広げられ、桃色のカーテンを揺らした。

やがてクレシヤは、殺気立ったまま口を開いた。

「グラーナ神殿付近の街ラニアよ。……あの塵以下の腐れ騎士団が駐留している、大地神 グラーナ の奴隷どもの街だわ」

エルが退室すると、クレシヤはごろりとベッドに横になった。自

分の身の丈くらい長い黒髪が風に踊り、ベッドの端からだらりと垂れさがる。その拍子に前髪も乱れ、彼女の目が微かに開いた。

漆黒の、恐ろしく無感情な冷たい瞳だった。レイフィーラの瞳が光に照らされて爛々と輝く黒真珠であるのに対して、彼女の瞳はあらゆる光を吸収し打ち消す暗黒物質ダークマターのようだった。彼女の瞳には虹彩が存在しない。部屋の天井を見つめる瞳は黒一色で、部屋中のあるあらゆる光を吸収して黒く濁りきっていた。

その癖、口許には真紅の唇が裂けそうなくらいの満面の笑みが浮かんでいた。それは表情のない目許とあまりにアンバランスで……ゲナがこの姿を見たら卒倒してしまうだろう。

「姉様……。今度こそ、終わりですわ」

クレシヤは目を閉じて、姉の姿を思い出す。

いつも体の弱い自分の先を行き、途方もない才能を持ち、天真爛漫で誰からも愛される……そんなこの世でもっとも憧れ、もっとも忌み嫌う姉。クレシヤの刺客をはねのけ、何故か騎士団のお膝元の街で身を隠し続けている姉。

その行動の意味はクレシヤには理解できなかったが　まあいい。きつとエルディルは上手くやってくれるだろう。そうでなければ困る。

「うふふ、楽しみだわ……」

ふと、自分と姉に仕えていた赤竜の執事であるナタクのことを思い出した。灰白色の髪を持った気のいい、それでいて優秀な執事。姉に劣る自分にも分け隔てなく優しくしてくれた、ある種父のような存在。

優しい彼は未だに姉を心配し、血眼で人間界を捜し回っていることだろう。愚かな男だ。姉を追いやったのは自分だというのに。

クレシヤは長い黒髪を乱しながら立ち上がると、突然両手を合わ

せて詠唱を始めた。程なくしてクレシヤの頭蓋ほどの水晶が机の上に現れた。

クレシヤが手をかざすと、透明の水晶の内部に光が宿り……だんだんと広がって、やがて一つの風景を映し出した。

それは朝焼けに輝く大地だった。上空から覗き込む形で、冬の寒さに枯れた草たちに覆われた草原が映っている。クレシヤは水晶より発せられる朝焼けの光に目をすぼめた。忌々しい“夜明け”の光も彼女の弱点の一つである。

「さあエル、わたくしを楽しませて頂戴」

それは先ほどエルの肩に仕込んでおいた映写器より届けられる映像だった。映像の贈り主はやや速すぎる速度で、無人の草原の上を飛行している。視界に映るあらゆるものに目もくれず、ただ一直線にラニアの街を目指している。

「どうやらサボってはいないようね」

クレシヤはまるで新しい玩具を買った子供のように、黒く淀んだまなこで水晶内の映像を一心に見つめていた。久しぶりに、自分の心が躍っているのがわかる。

久しぶりに姉の姿が見れる。

苦しみ、悶える姉の姿が見れる。

何も知らず 訳のわからないまま 息絶える姉の姿を。

クレシヤは早鐘を打つ心臓を落ち着かせるように、ふうと暖かな息を吐いた。吐息によって、水晶の表面が曇る。

曇りによって、エルの目に映る草原は不気味な 先行きの見えない白い霧で翳るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9988w/>

亜人少女に花束を

2011年11月26日01時47分発行